

ひたすらキャンプ・ツーリ
ング 2012年北海道



hohrohgin



深夜の1時すぎに眼が覚めた。さっそくバイクに荷物を積んで出発の準備をするが、この時間に家の前でエンジンをかけるのはためられる。オートバイを大通りまで押して歩き、キックで始動した。

走り出したのは1時30分だった。酒がけっこう残っていて、警察の検問があったら酒気帯びになりそうで不安だ。時刻が早朝の4時や5時なら取り締まりはもう終わっているのだろうが、この時間では可能性がある。しかしその心配は杞憂だった。

すぐに高速には入らず群馬県の前橋まで国道17号線バイパスを利用した。むろん高速代をケチるためである。前橋までは順調にすすんだのだが、欲張ってその先も国道をつかったのは失敗だった。前橋の北は道路が整備されていないため、車の流れが悪くなり、時間をロスしてしまう。沼田ICから関越道に入ったが、前橋からにするのが正解だった。

上越国境にむかっていくと気温は下がり、関越トンネルをぬけると寒いほどだ。しかし湯沢にくだってゆくと温度は上昇してくれた。

新潟西ICで高速をおりた。料金は1700円。新潟駅にいて営業しているレストランをさがすとマックとすき家しかない。すき家にはいり納豆朝食280円をチョイスした。つづいてセブンイレブンでフェリー内の食料を買い、フェリー・ターミナルについたのは7時20分だった。

いつの間にか日差しが強くなり暑くなってきた。フェリーではキャンプ仲間のおかちゃんとマユミさんといっしょになる予定なので、おかちゃんの車があるか駐車場をしてみる。すると特徴のある軽トラがあった。荷台にバイクが積まれ、幌がかけてあり、ホイールが赤いから一目でわかる。ふたりの姿はないがすぐに会えるだろうと思っていると、フェリーの受付で出会うことができた。

おかちゃんと初めて会ったのは2005年の支笏湖だった。フェリーで苫小牧に上陸した私は、支笏湖のモーラップキャンプ場に宿泊したのだ。そこでいっしょになったのがおかちゃん、その夜と翌日の朝に立ち話をした。おかちゃんはスズキの『ちょいのり』という原付バイクでツーリングをしているユニークな人で、とても印象深かった。その後おかちゃんとは何年も会うことはなかったのだが、北海道ツーリングのつながりで昨年再会することができたのである。人の縁は不思議なもの。そして今回はおかちゃんの婚約者のマユミさんと3人で船旅をすることになったのだ。



おかちゃんの軽トラは全天候型のマディーなタイヤが装着されていて、MTの4駆だ。MTは珍しいし、とてもこだわっている。おかちゃんには他にも2台の車を所有しているが、2サイクルのジムニーと古いシトロエンなのだ。シトロエン2CV。マニアックすぎる。

やがて乗船時間となった。バイクからなので先にフェリーに乗り込み、後刻また船内で会うことにした。船室は専用のベットだけがある、カジュアル・クラス。以前は二等寝台と呼ばれていたものだ。その寝台に荷物をおいて風呂にゆく。ターミナルで待っているあいだに汗をかいたからサッパリしたかった。浴場からもどつてくると、隣の寝台の方と話すなりゆきとなった。70を越えているのにハーレー・ソフテイルに乗っていらっしゃる神奈川の人だ。バイクだけが趣味ではなく狩猟もしているそうだ。猪を仕留めた話などをうかがった。

ハーレー氏はソロでツーリングした後で娘さんと合流し、タンデムで標津にゆくとのこと。標津のとは宿—格安の旅人宿—の、モリシバ、というところが大のお気に入りです。毎回ここで連泊されているそうだ。私は林道ツーリングに来て、標津の近くでは、虹別林道やからまつ湯、川北の湯などに行くつもりだと話した。

ハーレー氏は私と飲みたそうにしていたが、おかちゃんとマユミさんが待っている。失礼してラウンジにゆくとふたりが私を待っていてくれた。早速サッポロ・クラシックのロング缶で乾杯する。

おふたりは結婚の日取りが決まったそうだ。それは目出度い。またまた乾杯だ。式や新居のことをうかがう。結婚はうれしいものだが、いろいろと決めなければならないこともあってたいへんだ。

サッポロ・クラシックのロング缶を2本と缶チューハイを飲んだら酔ってきた。そこで一度解散し、ベットにもどったら眠ってしまった。眼を覚ますと17時でまた飲もうかと思ったがまだ早いと自重し、風呂にゆくことにする。時間のある船旅なので、ゆっくり入浴してサウナにも入り汗をながした。



風呂からあがると夕日がしずむ時間だと船内放送がながれている。デッキに出て写真をとろうとすると、マユミさんが一眼レフカメラをかまえていた。おかちゃんは寝ているとのこと。いっしょに撮影をしていると夕焼けの空の表情が刻々と変わってゆく。茜色と灰色のグラデーションがドラマチックにうつろっているのだ。これには眼がはなせなくなり、空が完全に暗くなるまで見守ることにしたが、マユミさんは先に引き上げていった。

空の色が変化しなくなるまでデッキにいた後で、ラウンジで飲みはじめた。ツーリング・マッフル（TM）やキャンプ場ガイド、自分でえらんできた行ってみたいレストラン・リストや居酒屋・一覧を見ながら焼酎をやっていると、おかちゃんとマユミさんがやってきた。おかちゃんは上陸の8時間前になると酒は飲まないそうだ。きちんとした人なのだ。一方いい加減でアルコールの誘惑に弱い私は、焼酎をぐんぐんと飲みすすむ。おかちゃんは先に引き上げ、マユミさんのほどなく部屋にもどっていった。私はそのままラウンジで飲んでいたが、やがて酔いを自覚してベットに歩いた。



1時くらいから断続的に眼がさめた。かなり酒がのこっている。それはそうだ。21時すぎまで飲んでいたので。早朝に小樽につくことはわかっていたのだから、飲酒を控えればよいのだが、そうはいかないのは毎度のこと。バイクではないがエンジンがかかると走っちゃうんだよね。

トイレに行って水を飲み、また寝たが船内があわただしくなったので3時に起床した。気分が悪い。胃もムカムカする。体がだるく、頭が重い。完全な二日酔いだ。

昨日も話をしたハーレー氏と会話しつつ下船の時間をまつ。私は宿酔だがハーレー氏は元気だ。ハーレー氏は元教師で柔道部の顧問をされていたとのこと。元教諭で柔道家でハーレー乗りのハンターだ。とても話が興味深く頼りがいのある方だった。

やがて車の下船の時刻となった。おかちゃんとマユミさんを見送らなければと思うが、体が重くてうごけない。寝台にすわったままハーレー氏と会話をしていると、4時40分にバイクの順番がきたと放送がはいったので、ハーレー氏と船倉にむかった。

5時に船から下りてゆくと、おかちゃんとマユミさんが待っていてくれた。これは申し訳ないことをした。おふたりは支笏湖にずっと滞在されるそう。おかちゃんと出会った場所だ。私も大好きな湖である。しかし今回は支笏湖にはゆかない予定なので、次の再会を約して走りだした。

札幌道の入口があったので高速にはいった。札幌までは100円。その先の札幌新道が350円。札幌は大都会だ。ビルが延々とつづく。札幌の街をながめながら、北海道にやってきたなと思う。今年も北の大地に来たんだなと。

札幌を離れると霧になった。太陽が隠れると寒い。帯広方向にむかってゆくが目的地は土幌高原ヌプカの里である。ここは景色のすばらしいキャンプ場なのだ。高速道路のSAかPAで食事をとりたと思っていたが、レストランが一軒もない。食堂どころか道東道にはGSもないのだ。これには驚いたが腹が減ってしまった。

由仁PAで休憩をとった。この先の占冠は山岳地帯となり、去年とても寒い思いをしたので、Tシャツとブルゾンに長袖シャツを追加した。それでも走りだすと寒い。空腹だし眠くもなってきた。高速をおりるのは芽室ICの予定だが、周辺にレストランはなかったと思うので、手前の十勝清水で出ることにする。料金は750円だった。



十勝清水の町は大きいから食堂もあると思ったのだが、時間が早いせいどこもやっていなかった。しかたがないからセブン・イレブンに入り、弁当を物色するも在庫がほとんどない。あたたかいものが食べたかったのだが、そうなるも炭火焼き豚丼しかなく、やむなくこれを朝食とした。期待していなかったが、豚丼は甘辛くて美味しかった。

8時すぎに走りだすがバイクがアイドリングしなくなってしまった。信号待ちでエンジンがストールしてしまうのだ。アイドリングを調整するアイドル・スクリューを回してみるが、いつもはこれでエンジン回転が上下するのに反応がない。ネジが馬鹿になってしまったのだろうか。まさかフェリーでアイドル・スクリューにロープをかけられたのか。それとも北海道の寒さのせい？ いや、気温が低いのとアイドル・スクリューがきかないことには関係はない。フェリーのロープもそんなことはないはずだ。しかしアイドリングをしないのは困った。今はエンジンが暖まっているから再始動は容易だが、明日の朝、冷えきったエンジンがかかるだろうかと不安になった。

信号でとまるとアイドル・スクリューを左右にまわしてみる。いつもは敏感に反応してエンジン回転が上下するのだが、どちらにひねっても反応がなく、やがて回転数が落ちてきてストールしそうになる。アクセルをふかし、エンジンが切れないようにして土幌高原ヌプカの里にむかうが、信号待ちのたびにアイドリングに注意し、エンジンがとまってしまうとキックで再始動することを繰り返し、まいったなと思いつつ走っていった。

8時50分にヌプカについた。ここは風は強いのだが見晴らしがよいので気に入っているキャンプ場だ。しかし今日は濃霧ですばらしい風景を見ることはできなかった。

キャンプ場には道内ナンバーのハーレー・サイドカーのご夫婦がいた。55くらいの方だ。昨夜は帯広の花火大会だったそうで、ここから花火見物をするためにやってきたそうだが、霧で何も見えなかったとのこと。ただその霧のおかげで寒くはなかったようだ。

おふたりは帰るところだった。ヌプカは平らな地面が少ないので、おふたりは私に自分たちの幕営地をあけてくださった。そこにテントを設営し、荷物を放り込んでヌプカのロッジに宿泊の手続きにゆく。すると営業時間は10時から16時までまだ開店していない。時間外は入口においてあるボックスに宿泊申込書と料金を入れる

ようになっているから、後にすることにした。

ハーレー氏は以前アフリカ・ツイン（ホンダの大型オフロード・バイク）に乗っていたそうだ。そのハーレー氏にこれから林道を走ってきます、と挨拶して9時30分に出発した。今年は初日からいちばんの目的地である、十勝岳周辺の長距離林道群を走ることになっていた。ここは昨年、台風の影響で崖くずれが発生して走行できなかったところなので、今年は優先的に走破することになっていたのだ。

高原にあるヌプカから下ってゆき、国道274号線で西にむかう。屈足にあるペンケニコロベツ林道が最初の目的地だ。北海道で林道に入るのは毎回緊張する。それは熊が怖いためだ。ヒグマに会うことはまずないと思うのだが、不安を消し去ることはできない。そこでどうしても恐怖感がなくなるのなら、林道に入らなければよいと考えるようにしている。北海道には楽しむためにやってきたのだ。やりたくないことはしなければよい。したいことだけをすればよいのだ。



ペンケニコロベツ林道の入口についた。昨年は工事車両がたくさんとまり、警備員のような人がいて、周辺の林道はすべて通行止めだと言われたが、雰囲気は変わっていない。工事の人や車こそいないが、通行止めの看板は去年とおなじく出たままになっている。それでも行けるところまですすんでみようと思って林道に入ってゆくと、わずか2キロほどで頑丈なゲートがあらわれた。ゲートは林道の路面だけでなく、左右の林の中まで伸びているから、脇をすりぬけることもできない。これではどうしようもないから、ペンケニコロベツ林道は諦めることにした。

林道の入口にもどってあらためて通行止めの案内板を見てみると、昨年とおなじく周辺の林道はすべて通行止めになっている。しかし日付が古いので、すぐ隣りを平行して走っているパンケニコロベツ林道にいつてみることにした。

パンケニコロベツ林道の入口はすぐ近くだ。変電所の横をはいってゆくのでわかりやすい。林道に進入するとゲートがあるが開いている。これはよかったと思ってすすんでゆくが、この先で通行止めになっていて、もどってきたらゲートが閉まっていたらどうしようかと考え、また熊の不安もかかえて、ビクビクしながらの林道走

行となった。



パンケニコロベツ林道に入ったのは10時30分だった。ここは元々走りやすいダートだったのだが、昨年の台風で傷んだためがずっとジャリが入れてある。ジャリが敷いてあると走りづらい上に、深ジャリになっているところや、水たまりでヌタヌタになっているところがあり、荒れていた。

誰もいない林道をゆく。パンケニコロベツ林道は29キロもある。29キロひとりきりで深い山の中を走るのには長く感じられる。オド・メーターで入口からの距離を確認し、残りの長さを計算しながら走った。



奥十勝峠からパンケニコロベツ林道方向を見る

タヌキ一匹と会っただけで奥十勝峠についたのは11時25分で、パンケニコロベツ林道を走破するのにかかった時間は55分だった。奥十勝峠は道路がトの字のようになっている。右にまがるとパンケニコロベツ林道なのだが、そちらは通りぬけできませんと看板がでていた。

久しぶりにやってきた奥十勝峠で一息入れる。ここはものすごく山深いところだ。3回か4回来ているが、人に会ったのは一度だけで、いつも静まりかえっている。物音も獣の気配もしないが、きっとまわりには生き物がたくさんいるのだろう。この先のシートカチ林道をぬければ舗装路の道道にでられるのだが、なんとか行け

るようだ。ここまで来て入口まで引き返すのは勘弁してもらいたいから、道路が通行可能であってほしかった。

奥十勝峠からは急坂の下りである。ここはいつも荒れていて、坂の勾配が落ち着くと路面もおだやかになる。たぶん四輪がブレーキをかけながら下るから、道が削られるのだろう。この先で秘奥の滝線に入るつもりだったが、道路崩壊のため閉鎖されている。この秘奥の滝線がいちばん人の気配がなく、秘境のようなところなので、走るのを楽しみにしていた。しかし通行禁止では断念するほかなかった。



シートカチ林道を道道718号線の曙橋にむけてすすんでゆく。ここはジャリがなく走りやすいがたまにヌタヌタがある。そこでハンドルをとられるが、パンケニコロベツ林道を走ってダートに慣れていたのでスムーズに走行し、ロング・ストレートがあるとアクセルを一気に開けて飛ばした。

秘奥の滝につづく则表示されている林道が2本あったが、支線と判断して入らなかった。路面が悪いだろうと考えたためだが、その1本は秘奥の滝線だったようだ。(秘奥の滝線は奥十勝峠の近くからはじまり、曙橋の手前でシートカチ林道に接続する)。

17キロのシートカチ林道をハイ・スピードで走りきり、12時に曙橋にでた。道道718号線の舗装路である。パンケニコロベツ林道は通行止めではなく、走行に支障はなかったのだ。林道の出口で写真をとっていると、私が走ってきた方向からKSRのライダーがふたりやってきた。私はかなりの速度でシートカチ林道を走ってきたから、すぐに誰かがやってくるとは思っておらず、びっくりしてしまった。しかも彼らの乗っているのは小さなバイクなのだ。私のDRほどスピードがだせるとは思えないから、たぶん彼らは私の行かなかった秘奥の滝からやってきたのだろう。

KSRのふたりは35くらいで夫婦のようだ。林道走行につきあってくれる女性はまずいないから、彼は幸運な男だと思う。そんな彼らに会釈をして走りだす。昼時になったので食事をとりたい。この付近で昼食をたべられるのは、この奥にある国民宿舎の東大雪荘だけなのでそこにむかうことにした。

曙橋から東大雪荘まで9キロの道のりだ。以前は浮きジャリダートだったが、現在は舗装化がすすみ、ジャリ道は3キロをのこすだけとなっている。それが寂しいが、大多数の人にとっては歓迎すべきことなのだろう。その3キロだけになったダートも、近々アスファルトでおおわれてしまいそうだ。

東大雪荘の奥にはトムラウシ自然休養林野営場がある。どんなところなのか一度見たいと思っていたので

行ってみることにした。東大雪荘の奥はもちろんダートである。登山道でもある狭い林道を1キロすすむと広場があり、そこがキャンプ場だった。トイレと水場があるだけのシンプルな野営場でだれもいない。ワイルドでよいところだが、ひとりでは熊が怖くて泊まれないと思う。



トムラウシ自然休養林野営場

東大雪荘のレストランで鹿の唐揚げ丼900円をえらんだ。客は私だけで料理は10分ほどで提供された。鹿肉の唐揚げは甘辛い味つけで美味しい。臭いはまったくないから、鹿と言われなければわからない一品で、ここでしか味わえない野趣あふれる食事をたのしんだ。



鹿の唐揚げ丼

喉が渴いていたので水とお茶を何杯ものんだ。バイクがアイドリングしないから、林道でとまっていられず、ほとんど水分をとっていなかった。林道でエンジンを停止すると、ヒグマが気になって落ち着かない気分になるから、休んだり水を飲んだりする気持ちになれないのである。

売店でトムラウシ山のロゴの入ったTシャツを買った。セールで1360円と安かったのだ。じつは数年前に来たときも安売りをやっていたのだが、金が惜しくて買わずに帰って後悔し、昨年来たときには特売をしていな

かったから悔しくて手をださなかった。それが今回は値引き販売をしていたからやっと購入したのである。それでもレジに持ってゆくまでずいぶん迷ったから、やはり私はケチだと自覚した。

東大雪荘をでようとすると雨が落ちてきた。サラサラと降るがすぐにあがってくれた。しっとりと濡れた路面をヌプントムラウシ温泉にむかう。シートカチ林道の出口だった曙橋にヌプントムラウシ林道の入口もあり、このダートを17キロ走った先に温泉があるのだ。

ヌプントムラウシ林道はおだやかなダートだったが、ここも去年の台風の影響で荒れていた。しかも先ほどの雨でぬかっているから手強い。路面を見つめて慎重にすすんでゆくと、KSRのふたりがやってきた。この周辺を走るオフローダーの行くところはおなじなのだ。彼らと手をあげてすれちがったが、その後も数台の車がやってきた。こうなると熊の不安はなくなるが、逆に見通しの悪いカーブでは、対向車がくる可能性があるから注意していった。

登って行ってピークを越え、その後は下ってゆく林道を走りきってヌプントムラウシ温泉に到着した。ここが林道の終点である。車は1台いるだけで、もっと人がいるものと思っていたから、忘れていた熊の不安を思い出す。自動車はプラドで中年の夫婦が乗っており、彼らは露天風呂に歩いているところだ。私も手ぬぐいをぶら下げて温泉にいった。



昨年台風で流されてしまったと聞いた沢をわたる橋は、新しい丸木橋にかけかえられていた。丸太の橋はのるとしなる。そのワイルドな橋をわたって露天風呂にゆく。プラドのふたりは風呂にはいることなく車にもどってしまう。山の中にひとりで残されるのは嫌だと思っていると、プラドは走り去ってしまった。

ここまで来たからには温泉につからないわけにはいかない。ヒグマが怖いから手早く服を脱いで湯にはいった。温泉はぬるい。源泉が入ってくるバルブが閉まっているのだろうかと思ったが、それを調整してゆっくりするつもりはないから、入浴中の写真をセルフ・タイマーでとって、早々に露天風呂からあがった。

林道をもどっいゆくとオフロード・バイク3台とすれちがった。やはりここは人気のスポットだ。3台の最高尾をゆっくりと走っていたのはビック・オフのアフリカ・ツインで、以前はカワサキ900忍者も来ていたから、大型のオンロード・バイクでも慎重に走ればいけると思う。

午前中の林道走行でバイクは埃だらけになっていたが、ぬかったヌプントムラウシ林道で泥だらけになって

しまった。バイクだけでなくショート・ブーツも、ジーパンの膝下もだ。こんなに汚れるならオフロード・ブーツが必要だと思う。以前は私もモトクロス・ブーツを持っていたのだが、ツーリングでもほとんどはかないから、古くなったのを機に捨ててしまっていた。膝下までのロング・ブーツを買う価値があると感じたが、それは今使っているブーツがダメになってからにするのは、ケチな私としては当然のことである。



ヌプントムラウシ温泉 建物は脱衣所



泥だらけになったバイクと靴

次は糠平湖の北にある岩間温泉に行くつもりだったが、時間が遅くなったので明日にすることにし、代わりにオソウシ温泉から鹿追自然ランドにぬける林道を走ることにする。夕刻になると熊の活動がさかになり、遭遇する可能性が高まるから、林道走行は日の高いうちに終えたいのである。栃木県の鬼怒川で地元の人に聞いたところでは、熊は夜明けと夕方に水を飲むために沢にでてくるとのこと。だから明け方と日暮れ時は注意が必要だと。これは溪流釣りをしていたときに教えてもらったことだ。月の輪熊とヒグマのちがいはあるが、熊の習性はあまり変わらないものと思われる。

舗装路の道道718号線を快適に下ってゆく。たまに雨粒が落ちてくるが、降りだすまでにはいたらなかった。岩松のオソウシ温泉の入口につくと、通行止めの看板がたっている。ここも去年の台風のために道路が

崩壊し、復旧工事中とのこと。しかし東大雪湖まで10キロもどれば、そちらから林道で入れると表示されているので、今来た道を引き返すことにした。

道道をもどってゆくとダムの手前に急坂のダートがあらわれた。あまりに上り坂が険しいので、これではないだろうと思ったがここだった。急勾配を慎重にのぼってゆく。坂を登りきると林道は落ち着いた。しかし交通量は少なく山は深い。こんなところに温泉宿はあるのかと思ってゆくと、路上に鹿の皮のようなものが落ちている。これって熊の食べのこし？ それとも絨毯の切れっばしか。真相はたしかめることなく通過した。



オソウシ、ではなく、オソイヌ温泉

林道はおおむね走りやすい。鹿追自然ランドへの分岐となる丁字路の先、東大雪湖から5.7キロすすんだ地点にオソウシ温泉はあった。ものすごい山の中だ。建物には銃をもつハンターや熊や鹿の絵が描いてあるが、建築物もペンキ絵もひどくチープで客はいない。宿の人らしい中年女性が玄関からこちらを見ていたが、私のことを客ではないと見定めて中に入っていった。

オソウシ温泉につかるつもりはなかった。どんなところなのか見にきただけである。先にすすむこととし、Uターンするために温泉の敷地にバイクを乗り入れた。するとハンターなどが描かれた建物から犬が弾丸のように飛び出してきた。犬は大型の秋田犬で、歯をむきだしにして吠えまくっている。まっすぐにこっちに走ってくるからパニックになりそうになった。

Uターンしようとする速度を落とさなければならない。すると犬は左足に迫ってくる。さっきの宿の女は気づかないのか。犬をなんとかしてくれないかと思うが、誰も出てくるようすはない。そうこうするうちにも敷地の境界がせまり、Uターンしてゆくが、犬が左足に肉迫してくるので、スタンディングして左足をシートの上にあげ、噛まれないようにする。そしてバイクが出口の方をむくと一気に加速した。犬は歯をむいて追ってくる。どこまでついてくるのかと思ったら、温泉の入口までで、そこからは一歩もでてこない。それが犬のテリトリー意識のようだ。

助かった。しかし怖かった。もしも慌てて転んだりしたらどうなったのか。噛まれたら大怪我をしたはずだ。犬を放し飼いにするのは獣よけのつもりなのかもしれないが、客商売の温泉宿がすることではない。温泉失格である。ここはオソウシ温泉ではなく、オソイヌ温泉だ。



鹿追自然ランドへの分岐にもどる。この丁字路は北海道らしく広々としたところだ。絵になっていると思えば写真をとるが、こんなに豪快な丁字路は他にないのではなかろうか。左の道をまっすぐゆくと東大雪湖、後方がオソウシ温泉、右手が鹿追自然ランドである。

鹿追自然ランドまで11.6キロとでている。締まっていて走りやすいダートだが、分岐が多いオソウシサラウンナイ林道をゆく。急坂の上り下りがあり、分岐の看板が壊れていたりするが、本線ははっきりしているので迷うことはない。熊の心配もこのころにはしなくなっていた。ヒグマはいるのだろうが、バイクの走行音が聞こえれば出てこないと思う。それでも見通しの悪いカーブに入る前にはホーンを鳴らしてゆく。すると熊はいないがタヌキと山鳥はいるから、彼らは耳がよくないのだろう。タヌキはジャリ道にいるが、キツネは舗装路にいるなど気づいたりする。キツネは人間に餌をもらいたくて、交通量の多い道路に出てくるのだろう。

15時52分にオソウシサラウンナイ林道を走りきり、鹿追自然ランドに到着した。東大雪湖からここまではじめてのルートだったし、今日の林道走行はこれで終わったので、いささかホッとする。オソウシサラウンナイ林道は起伏はあるが走りやすいダートなので、またやってくることになると思う。

つづいて以前たずねたときには沢が増水していて、露天風呂が水没していた、国設然別峡野営場にある、鹿の湯にむかうことにした。道道1088号線を北上してゆくが、ここも以前は全線が浮きジャリダートだった。それが今はきれいに舗装されてしまっているから、オフローダーの私としては残念だ。そのアスファルトの道を快調に飛ばしてゆくと、然別峡の入口の然別林道が通行止めになっている。鹿の湯には行けないのか？、と思ったが、この先から然別峡に入ることができたのだった。

然別峡の先に伸びている然別峰越林道を走りたいと思っていたが、今年もダメなのだろうか。何年か前も走行しようとして通行止めだったのである。それは明日たしかめることにして露天風呂にむかう。野営場の入口にバイクをとめて、キャンプ・サイトの奥にある沢に歩いてゆく。キャンプ場にはテントが点在している。ここは買物は不便だがロケーションのよいところなので、いつか利用してみたいと思っていると、さっき会ったKSRのカップルもここに幕営していた。

沢にでると露天風呂が見えてきた。鹿の湯は沢沿いに作られた野趣あふれる岩風呂で、年配のご夫婦が入浴中だった。若者3人も近くにいるが入るのをためらっている。私はおふたりに声をかけていっしょにつからせてもらった。すると若い人たちもやってきたからにぎやかな湯浴みとなった。



沢沿いにある鹿の湯

シャンプーと石けんを持参しているのでそれで体をながす。皆さん北海道の人だったが、私だけが余所者だ。それでも一期一会の皆さんとなごやかに温泉をたのしんだ。ここの湯は熱い。ぬるかったヌプントムラウシ温泉とは大違いで、長くつかってられない。汗がとまらなくなるのは嫌なので、そうなる前に湯からあがった。

然別峡をでてアスファルトの道道を快調に下ってゆく。翌日に備えて満タンにしてキャンプ場に入るのが習慣なので、鹿追で給油をした。こうしておけば明日も朝から思いきり走ることができる。

士幌の町に夕食の買い出しにむかう。しほろフード、と言うスーパーに惣菜や弁当があるのは昨年利用してわかっていた。18時前に店に入ると弁当や刺身が半額になっている。そこで刺身を350円、のり弁を150円で買ったが、これでは安くて申し訳ないほどだ。他に士幌産の冷麦、カップ麺、水をもとめ、近くのセブンイレブンのどごし生の500ml缶を手に入れてヌプカの里にもどった。



半額の刺身と のり弁

ヌプカのロッジは既に閉まっていた。そこで入口においてある宿泊者名簿に住所と氏名を記入し、料金350円をボックスに入れておく。キャンプ客はいないがコテージに宿泊者がいて子供のはしゃぐ声が伝わってくる。

朝と同じく霧が深くて星も夜景も見えない。しかし霧のおかげで暖かった、というハーレー・サイドカー氏の言葉を思い出したりした。ラジオを聞いていると、札幌・石狩地方に竜巻注意報がでていているという。その地域からは遠く離れているから、影響はないと思う。今夜のヌプカはおだやかで風もまったくないから、テントのペグは1本も打たなかった。

556. 4キロ



霧のヌプカの里



絶景のキャンプ場 ヌプカの里

夜半に風のうなり声で眼が覚めた。いつの間にか風が強くなり、山の下から吹き上げている。ヌプカは風の強いところだが、昨夜は無風だったので、油断してテントのペグをまったく打っていなかった。テントの中では谷側に荷物をおき、山側に寝ていた。また突風がきた、と思ったら、横になっていた私を基点にして、テントはひっくりかえってしまった。荷物が上から降ってくる。飲みさしの酒もおいてあったから、それもかぶってしまった。冷てえ！

テントをたてなおし、真っ暗な中で手さぐりでランプをさがす。荷物をごちゃごちゃになってしまったからなかなかみつからない。やっと明かりをつけるとテントの外にでてペグを打つが、雨も降っているから、酒の上に雨水にも濡れてしまった。ペグ・ダウンしてテントにもどると時刻は2時30分だ。シュラフの上に横になるが、風がゴオツと音をたてて吹き荒れると身構えてしまうので、しばらく眠れなかった。

5時15分に眼が覚めた。テントの外にでると雨はあがっている。霧も風に吹き飛ばされたのか晴れていた。風はまだ強い。今日はテントを張ったままにして、空荷で岩間温泉にゆく林道と然別峰越林道を走行し、その後撤収して別のキャンプ場に移動するつもりだった。しかしこの強風が気にかかる。テントをおいたままにしても大丈夫だと思うが、万一突風に飛ばされてしまったらかなわないから、撤収して林道にゆくことにした。荷を積むと当然ダートでの走行性能は落ちるのだが、以前にもその状態で岩間温泉の林道を走っているから、問題ないと思う。

ヌプカはやはり景色のよいところだ。眼下に十勝平野がひろがっている。風が強いのが難だが、この絶景は捨てがたい。そこで強風をよけられるところはないかと場内を歩いてみた。しかし、ない。したがってここでは常にフル・ペグで備えるしかないという、当り前の結論に達したのだった。

アイドリングしないバイクの始動が不安だったが、キックするとDRはいつもと変わらずに眼覚めてくれた。チョークはきく。しかしアイドリングは不安定だ。7時5分に出発する。ヌプカはゴミ持ち帰りなので、昨夜買物をしたセブンイレブンで捨てさせてもらう。お礼に電池とカップ麺を買ってまた走りだした。バイクはアイドリングしている。回転は低いが、なんとか止まらずにまわっているから、エンジンの調子もどってきたようだ。気温は高くなり暑い。日差しも強く、北海道ではないようだった。



崩壊しつつある橋

上土幌をぬけて国道273号線を北上してゆく。糠平湖にさしかかると旧国鉄時代の橋の案内がでている。以前にはなかったものだから、近年高まったタウシュベツ橋人気で整備されたものなのだろう。私は鉄道マニアでも遺構好きでもないが、アーチ橋の看板がでていると寄っていきたい気持ちになり、崩壊しつつある古い橋の写真をとったりした。

熊出没注意の表示も増えてきた。交通量の多い国道にヒグマがでてくることはまずないと思うが、ゴミ捨て禁止の看板もあるから、その意味のほうが強いのだと感じる。

三の沢橋でまた写真をとっていると関西ナンバーのセロー氏といっしょになった。セロー氏はTシャツにネックガードという軽装で走っている。そうすれば涼しいのはわかるが、北海道は虫が多いので、私はジャケットをきっちりと着ている。過去に何度もスズメバチが体にぶつかったことがあるから、Tシャツだけでは不安なのだ。

以前タウシュベツ橋まで行くことができた糠平三股林道は通行止めとなっている。フラットな道で崖くずれがおきるようなところもないと思うので、訪ねる人が増えたから規制したのだろう。その代わりにタウシュベツ橋を遠望できる展望台ができていた。湖越しに橋をながめることができるのだが、バイクを国道沿いにとめて森林の中を120メートル歩くことになる。森は深いので熊鈴とホイッスルを持っていった。



タウシュベツ橋を湖越しに見る

ホイッスルを吹きながら林をぬけるとタウシュベツ橋が見えた。今日は水が多く橋げたはほとんど水没している。しかしここから遠望するだけなのはさみしい。たくさんの方が行くと橋の崩壊がすすむし、自然破壊にもなるのだろうが、間近でながめたいものである。

岩間温泉につづく音更川本流林道の入口をさがしながら国道を北上してゆく。林道は何ヶ所かあったが、それとわからずに通りすぎ、三股山荘についてしまった。ついでなので三股山荘にいてみると今日は休みだ。月曜は休業なのだった。

来た道をもどると音更川本流林道の入口はすぐにあった。名前は失念したが、どこかの山の登山口であると案内もでいた。音更川本流林道は走りやすいダートだ。しかし荷物を満載しているので、ゆっくりとすすんでいった。

林道の後半に急坂があったと記憶しているので身構えてゆく。前は急勾配で慎重になりすぎてエンストしてしまったのだ。急坂があらわれたら、思い切りアクセルを開けて一気に登るつもりでゆく。また分岐はかなり先、10キロほど走った地点に登山口とわかる二股があるだけだと思っていたのだが、林道をはいてすぐのところにもあったから、覚えている印象は当てにならないものだと思う。



どこが道？

林道の入口から4キロほどすすんだとき、突然目の前にジャリ山と溝、それに広場があらわれた。カーブをまがったら見えたのだ。なんだ！ どうなってる？ どこが道なのかわからず広場にバイクをとめた。バイクからおりてよく見てみると、ジャリ山だと思ったところが林道なのだ。大粒のジャリを敷いた道が登り坂になっていて、ジャリ山に見えたのである。ここは道路の崩壊現場を突貫工事で修理したところだ。溝は雨水を逃がすための水路で、ジャリ道は上ってから急坂のくだりとなっているが、大粒の深いジャリ道が100メートルほどつづいていた。

玉ジャリの道には車がつけた二本の轍がある。しかしここもジャリが浮いているから走りづらそうだ。道の左は溝で、右は崖だから、轍からはずれたらどちらかに落ちるかもしれない。落下するとバイクを引き上げられなくなるから、その前に自分で転んだとしても、玉ジャリの急坂で荷物を満載したバイクをおこすのは非常に困難だ。荷をすべておろして、バイクを引き起こし、坂の下まで押して行って、その後荷物を手で運んでまたDRに積むことになるだろう。いや、そうなったら先に進むのは嫌になってしまって、引き返すことになるはずだ。い

ずれにしてもたいへんな苦勞をするのは必定なのだった。

慎重にゆけば通過できると思う。しかし荷物が重いから、思うようにならないかもしれない。どうしよう。行くか、やめるか迷う。空荷ならすすんだ。しかし荷物を満載している今は、転倒したときのことを考え、断念することにした。北海道には楽しむためにやってきたのである。少しでも不安なこと、ムリなことをすることはしない。やりたいことだけをすればいいのだ。



然別峰越林道

林道をもどり糠平湖に引き返してゆく。糠平湖から然別峰越林道にゆくために、道道85号線にはいって然別湖方向にすすんだ。然別湖の手前にある山田温泉に林道の入口があり、昨日いった鹿の湯のある然別峡に通じているのだが、林道は通行止めとなっていた。道路決壊のために通行止めとある。この林道は何年も通行禁止だし、路面には雑草が生えてしまっているから、もう復旧するつもりはないのかもしれない。然別峡には南から舗装道路がとおっているから——昨日走った道だ——この林道を整備して維持してゆく必要性はないと判断されたのではなかろうか。経済合理性を考えれば当然そういうことになると思う。

然別湖でこれからのことを考えることにした。2001年にもここでその先のことを思案したことがある。あの時はひどい雨で、キャンプはムリと判断し、生涯で一度だけ利用することになったライダー・ハウスに泊まることにしたのだ。然別湖をながめながら、毎度同じようなことをしているなと思ったりした。

ものすごく暑い。日向にいるのは辛いので日陰で地図をひろげ、これからの日程をつめる。この地域で予定していた林道走行は終わったので、次にどこに移るか考えたのだが、その前に帯広の美術館にむかうことにした。8月29日まで棟方志功展がひらかれているので、見たいと思っていたのだ。その前に昼時となったので、ヌプカのすぐ南にある、カフェ・ブーオで食事をとることにする。カフェ・ブーオにはブーオという大型パンの中にスパゲティーなどを詰めたオリジナル・メニューがあり、何年も前から一度ためてみたいと思っていたのだ。

然別湖をでて白樺峠をこえ、鹿追に下って国道274号線を東にすすむ。ヌプカの入口をすぎるとカフェ・ブーオの看板があらわれ、国道から左に折れるが、お店につづく200メートルの道はダートだ。これほど私にふさわしい店はないなと思いつつ、フラット・ダートを飛ばしてゆくと、なんとカフェ・ブーオは休みだった。月・火は

休業とのこと。残念だ。

しかたがないので、行ってみたいレストラン・リストをひろげて別の店を物色すると、帯広に老舗焼肉店の平和園があった。ジンギスカン定食が520円で格安との情報だ。美術館にゆく前にここで昼食をとることにした。



ジンギスカン定食+豚ホルモン

帯広も暑い。日向にいただけで汗が吹き出してくるほどだ。帯広駅近くの平和園につき、汗で肌にまとわりついてなかなか脱げないジャケットをとり、店内に入った。メニューを見ると美味しそうな肉がたくさんある。生肉の手切りにこだわっているともでていた。そんな中でよい年をした男が格安のジンギスカン定食を注文するのは恥ずかしかったのだが、お店の人はいちいちそんなことは気にしていないだろうと思い、それをたのむ。ただ肉の量が少ないと残念なので確認してみると、100グラムとのこと。それでは足りないから豚ホルモン380円もいっしょにお願いした。

料理はすぐに提供された。肉にご飯におしんこ、味噌汁にグレープフルーツまでついてボリュームたっぷり。これで520円ー豚ホルモンをつけると900円ーは破格だ。さっそく食べてみるとジンギスカンは少し羊臭があるがジューシーで美味しい（羊臭があるほうが私は好みだ）。一方の豚ホルモンは臭みはまったくなくてコリコリ。ただホルモンは酒のツマミであっておかずではないな。したがってここではジンギスカンを二人前にしてもらおうのが正解だと思う。もちろん上等な肉をチョイスするのもよしだ。

平和園をでて美術館にむかう。美術館は帯広駅の南にある緑ヶ丘公園にある。緑ヶ丘公園は大きな公園でいろいろな施設があり、どこに美術館があるのかわからないから、外周をまわってさがしてゆく。案内がでていたのでバイクをとめて美術館に歩くと、なんとここも月曜休館だった。月曜は美術館やレストランは休みばかりだから、街にでてこないで山の中を走りまわっていないといけない。残念だが棟方志功展は諦めることにした。

駐車場で地図を見ていたら急に差し込んできてしまった。いそいでトイレに行こうとしたが、急激にぬきさしならない状態になり、やむなく植え込みに入って事無きを得た。公園は元刑務所のように木が多くて助かった。しかし旅のはじまりの頃にはこんなことがよくある。まだ心身が放浪に慣れていないからだろう。

しかしものすごい暑さだ。汗がとまらない。ヘルメットとジャケットがしとどに濡れている。アスファルトもゆるくなっているが、関東も昔はこうだったと思い出す。最近都内の舗装は軟化しないから、気温上昇に対応してアスファルトも改良されたのだなと思ったりした。



棟方志功展のポスター

道東道の音更帯広ICから高速にのった。終点の足寄は近く、料金は650円。足寄も暑い。気温は32.3℃。日差しがジリジリと肌を焼く感覚は都内と変わらない。こんなに暑い北海道ははじめてで異常だと思う。それでも走っていると虫が次々にぶつかってくるから、ジャケットを脱ぐわけにはいかず、水をがぶ飲みしてまた走りだすのだった。

阿寒湖にむかってR241の山岳路をゆく。鹿の飛び出しに注意しながら走り、足寄峠にさしかかったときに、ここから西のカネラン峠方向に、3本の林道が平行して走っていることを思い出した。2007年にもこの林道を走りにきたのだが、フカフカの土砂が入ったばかりで走りづらく、やめてしまったのだ。今回はここも走破してやろうと考えたが、今日のところはキャンプ場にむかうことにした。

道東では別海ふれあいキャンプ場に泊まりたいと思っていた。しかし別海は弟子屈から56キロもある。一方で何度も利用したことのある、屈斜路湖の和琴半島湖畔キャンプ場は弟子屈から15キロだ。どうするか。まだ行ったことのない別海にしたいが、時間も遅くなっているのを和琴に幕営することにした。

弟子屈のスーパー・フクハラで買物をする。鯨の刺身が398円、北海しまえびが280円なので夕食はこれにした。それに半額のポテサラと焼酎を買う。隣りにあるホームセンターのツルヤをのぞいてみたら、北海道らしく薪ストーブがあり、これが安い。3880円や3980円の品がある。車で来ていたらインテリアとして手に入れたと思うが、バイクではどうしようもないね。

和琴半島にむかうが、弟子屈から10キロちょっとなのに、ここを走るときはいつも遠いなと感じる。それは早くねぐらに落ち着きたいと思うからだろう。その和琴半島湖畔キャンプ場は見たこともないほど混んでいた。どこにテントを張ったらよいか困るほどだ。これまで9月にしか来たことがなく、キャンプは数えるほどしかいなかった。これがハイ・シーズンの状況だと知ったが、正直驚いてしまった。

ライダー、自転車専用サイトは満杯だし、濃そうな人が集まっているから敬遠し、離れたところにキャンプ地をさだめた。キャンプ料は1泊450円。さっそくテントを設営し、シュラフをひろげて野営の準備をととのえる。そ

して湖心荘に入浴にゆく。料金は400円。今日の汗をながした。

風呂ではTシャツとパンツの洗濯をした。私しかいなかったので都合がよかった。靴下は捨てた。Tシャツ、パンツ、靴下は出発の日からずっと同じものを着ていたから3日もたっていることになる。我ながらすごいなと思ったが、靴下の臭いもすごかった。



鯨の刺身と北海しまえびの夕食

テントにもどって夕食をはじめ。鯨は独特のにおいがある生臭い。北海しまえびは美味しいのだが、頭や殻をとるのが面倒だし、たくさんあるから飽きてくる。それでもビールといっしょにすべて平らげた。

383.9キロ



バイク・自転車サイトとその先に和琴半島

5時に起床した。カラスが夜明けの4時半頃から騒ぎだし、うるさくて寝てられない。でも他のキャンパーはほとんど起きてこないのは、彼らはまだ若いからだろう。若いと眠りが深いからね。冷麦を茹でて朝食とする。土幌のスーパーで買ったもので、一袋280グラムの半分を今日の朝飯とした。冷麦はさっぱりとしていて美味しく、何より安いから大満足だ。

5時55分から和琴半島を一周する遊歩道にゆく。2005年にもまわっているのだが細かいことは忘れてしまった。ただ森が深くて熊がでそうだと思ったことを覚えていたので、熊鈴を首からさげていった。



湖から湯がわいている和琴半島

散策路はハイキング・コースのように起伏のある道だった。そういえばこうだったと思い出し、やって来たことを後悔する。それでも進んでゆくと温泉のわく火山の島だけに、湖のあちこちから煙がふきだしていた。マニアの入る秘湯もあるようだが私はそこまではやらない。またここはミンミンゼミの北限の地だ。火山で地熱が高

いため、寒冷な北海道でも生息できるのである。そのミンミンゼミは半島の先端部で2匹が声をあげていた。

2. 4キロの探勝路を歩いて6時50分にキャンプ場にもどってきた。きつかったし、疲れたからもう行くことはない。今日は周辺の林道を走って連泊するつもりなので、レストハウスで手続きをする。7時30分に出発するが、他のキャンパーはまだ支度中だった。

今日も晴れている。弟子屈にむかうがツーリング中は夢のような毎日だ。朝起きて林道ツーリングをし、好きなものを食べ、夜はキャンプをして酒を飲む。これを一週間もできるなんてなんて幸せなんだろうと思う。そしてこんなことを毎年繰り返しているのだ。真面目に毎日をすごしているご褒美だが、家庭と職場に感謝しないといけないと思う。

多和平の手前から霧がわきだした。この辺りは霧の多いところだが、開陽台方向に道道885号線に入ってゆくと晴れてくれた。霧の中は寒いが晴れるとちょうどよい。2005年に走ろうとしたが、入口がわからずに断念した虹別林道にむかう。2005年版のTMには林道入口の目印は記載されていないが、2007年版には「志穂牧場」「ふ化場」とでていてわかりやすい。現地には「西別岳登山口」の看板もあるから、行けばすぐにわかるはずだ。



虹別林道の入口

志穂牧場からふ化場にすすむと、ふ化場からダートがはじまり、その先に虹別林道の看板がたっている。それが上の画像だ。ここで写真をとっているとエンジンはアイドリングせずにストールしてしまい、またかよ、とガッカリしてしまった。

朝一番の林道なので緊張してゆく。もちろん熊を警戒してだ。8時10分にスタートし、全長13.5キロと表示されている虹別林道をゆくが、走りやすいし車の交通量も多いことがわかる。すすむと工事現場があり、重機がうごいているからヒグマの心配はなくなった。

走りやすいダートを飛ばしてゆく。TMにはアップ・ダウンを繰り返すストレート・ダート、と書いてあるが、連続して小山を上ったり下ったりしていくような独特の地形だ。8時25分に西別岳の登山口に到着する。広い駐車場がありロッチがたっている。こんなに立派な建物があると思っていなかったから驚いた。駐車場には車が4台とまわっていて、4人の中年男女が登山の準備をしていた。登山道の案内がでているので見てみると、頂

上まで3.2キロとのこと。それなら私にも行けるかなと思うが、その次に熊鈴と熊撃退スプレーを持参とあり、やはりそんなところに行くのはご免だと思う。ここも暑かった。山の上の登山口まで蒸し暑いとは、今年の北海道はほんとうにどうかしている。

登山口から下ってゆくと道道150号線にでる直前にボンベツ林道の分岐があった。このまま虹別林道をゆく予定だったが、ボンベツ林道は5.6キロとでているので、行きがけの駄賃だとばかりに走り散らしてゆくことにする。しかし甘く見たらしっぺ返しが待っていた。ボンベツ林道は玉ジャリが敷きつめられていてとても走りづらいのだ。そのため早々に断念してUターンする破目になった。玉ジャリ、深ジャリは苦手なのだ。特に深ジャリはトラウマになっていて、今回の旅の後半でそれを克服したいと思っていた。



虹別林道 後半部

あらためて虹別林道をすすむとすぐに舗装路の道道150号線にでた。時刻は8時45分なので、西別岳の登山口から15分、林道の入口からは30分ほどの時間がかかったことになる。虹別林道は道道150号線をまたいで、更に11.5キロ伸びている。ゲートはあるが開いていた。この先はアップ・ダウンがきつくなり、険しく、浮きジャリもある路面だった。

虹別林道を走りきり、養老牛温泉の北、道道505号線にでた。道道505号線はジャリダートを舗装している工事中だった。この近くにからまつ湯があるはずなのだが、どこにあるのかわからない。道道をわたった先に細い道があるが、すすむと丁字路になり、右は行き止まりで、左には廃工場のようなものがあるので、ここではないと判断した。

地図を見ていると首にタオルを巻いた青年が札幌ナンバーのセダンでやってきて、廃工場の方へ入っていった。TMを見てもわからないので養老牛方向にしてみる。しかしからまつ湯は沢沿いにあるはずなのに離れてゆくから、方向がちがうと判断してUターンした。そこでさっきの青年のことを思い出す。青年は風呂に行くから首にタオルを巻いていたのではないか。あの、何もなさそうな廃工場の奥に、からまつ湯はあるのではないか。さっそく行ってみるとすぐにからまつ湯はあったのだ。

からまつ湯は透きとおった温泉だった。沢沿いに石を積んでつくった素朴な野湯だ。湯につかっていた青年に声をかけて私も入らせてもらう。湯は熱い。青年は30くらいの人だ。都内出身だが現在は中国で勤務しているとのこと。彼は若いころにオンロード・バイクで北海道ツーリングをしたことがあるそうだ。そうでなけれ

ばこんな秘湯にやってこないよね。昨夜、中標津空港についてレンタカーを借り、深夜の1時まで移動して車中泊したとのこと。私と肌のあう人だった。



沢沿いにある野湯 からまつ湯

彼は以前もからまつ湯に来たことがあるそうだ。その時はジャリ道がもっと長かったとのこと。そしてこれから私の行くつもり、川北の湯に入ってきたところだと言うので、ようすを聞いてみた。彼によると国道の入口はわかりやすく、路面は車かオフロード・バイクでしか走れないジャリ道とのこと。入口から5キロほどの距離で、林道には1キロごとに案内がでているそうだ。湯は白濁したよい温泉とのことだった。

私は虹別林道を走ってきたことを話した。13.5キロと11.5キロの合計25キロの林道が摩周湖の南からここまでのびていて、私は林道ツーリングをするために北海道に来たこと。その途中にある秘湯につかっていること、休暇は5日間で前後の土日をつけて9日間の日程であること。彼の旅は3日間だそうで、その間は野天湯ばかりをまわるのだそうだ。

車の彼が先に出発した。遅れて走りだすと養老牛方向にダートをゆっくりすすむ彼がいたので手を上げてぬいた。しかし次は「牛」と書かれた山、モアン山に行きたいと思っていて、その方向がちがうことに気づいて止まると、また彼にぬかれたのだった。



モアン山は逆方向だった。来た道をもどってからまつの湯の先にゆく。すすんでゆくと「牛」と書かれた山が見えてくる。京都の大文字焼きのように、緑の山に牛の字のところだけ草が刈られているのだ。モアン山は開陽台にむかう道道885号線からもよく見える山である。牛の字がよく見えるところまで近づいて写真を取り、また養老牛にもどっていった。

ここまで来たら開陽台に寄らないわけには行かない。すぐ近くなのだ。今年の開陽台は晴れていて根釧台地がよく見えた。去年は熊の出没で閉鎖されていたキャンプ場もオープンしていて、テントがひとつたっている。展望台から四方を見下ろして、地球が丸く見える、と書かれたモニュメントといつしよに写真をとった。

駐車場にもどると北関東ナンバーのハーレーFLHの年配の紳士がいて、バスの運転手と話をしていた。2週間の予定でホテルに泊まって北海道をまわっているそうだが、昔は——25年位前——こんな上品な人はハーレーに乗っていなかったし、宿を利用するライダーが開陽台に来ることもなかった。バイクに乗っているのは金銭的な成功者であってもアウトローばかりだったし、開陽台にやってくるのは金のない野宿ライダーと決まっていた。それが年月がながれ、ライダーは高齢化し、品がよくなり、私も年をとったのだ。



北19号線

直線路が人気の北19号線で写真をとる。BMWのタンデム・ライダーや若者もいたのでにぎやかな画像をとることができた。この真っ直ぐな北19号線をゆく。晴れると暑く、曇ると涼しい。どこまでも伸びる道路、左右に広がる牧草地、どこにも見えない人と車。道東のこの空間にいることがとても心地よかった。

川北の湯にむかう。北19号線の先の道道975号線から川北の湯につづく笹の沢林道に入ってゆけるのだが、その入口がわからないから国道244号線にでて、こちら側からの入口をさがす。国道からの入口には大きな看板がでているからすぐにわかった。温泉まで5キロと表示されている。看板の奥には荷物を満載した関西ナンバーのセローがとまっているが、ライダーはいない。その人はダート走行を避けて、車に便乗させてもらったのだろうか。

温泉につづく林道は走りやすいフラット・ダートだ。からまつの湯で会った青年が教えてくれたとおり、1キロ

ごとにあと何キロと案内がでている。最後の1キロだけ荒れていてきびしい路面だったが、オンロード・バイクでも行けると思う。



川北の湯

川北の湯につくとちょうど車が1台帰っていった。セローのライダーはこの乗用車にのっていただろうか。駐車場には車が2台とキャンピング・トレーラーが1台とまっている。温泉にゆくと老人と青年がいたので私も仲間に入れてもらった。からまつの湯で会った青年の言っていたとおり、川北の湯は白濁した温泉だ。入ってみると熱い。沢の水をホースで引き込んで湯温を下げるようになっており、老人がそのホースの近くの熱くない場所をゆずってくれた。

沢の水でうめているが元々熱い温泉なので長くつかってられない。湯からあがると日差しは強く、日向は暑い。日陰で体を冷ましながら青年と話をする、彼は札幌の人だが数年前まで東京勤務をしていたそうで、その勤務地や彼が住んでいた地域は私もよく知っているところだった。

青年はこの辺りの秘湯に詳しかった。これから行こうと思っている薫別の湯についてたずねてみると、林道は土砂崩れで何年も前から通行止めになっているとのこと。これは耳よりな情報を聞くことができた。行けないとわかっていれば、無駄な時間や労力を使わずにすむからである。

老人が風呂からあがり、青年もつづいた。山の中にひとりで残るのは嫌なので私も切り上げることにする。青年がレガシーで出発したが、まだ車がのこっているの見にいってみると、車中で年配の夫婦が休んでいた。ここは他の野天湯とちがって男女別になっているから、女性も利用しやすいところだ。ポットンだがトイレがあるのも便利である。

通行止めと聞いたが林道の入口が見たいので、薫別の湯につづく滝の沢林道にゆく。林道は金山スキー場からはじまる。ゲートは開いていたが通行止めと書いてあった。TMと林道の名前がちがっていて、金山薫別林道となっているが、ここから土砂崩れの現場まで行けるのだろうか。いずれにしても通行止めだから無理に入らない。マナーが悪いとか、ルールを守れなどと言われるのは真っ平だし、それに逆切れして怒鳴り返したりするのは、ものすごく格好悪いから。

昼時となったので行ってみたいレストラン・リストを見た。しかしこの近くの店はリスト・アップされていない。それでも何年も前にTMに書き込んでおいたメモがあった。中標津のレストラン河亭、と。私は常々自分の

らった労力を無駄にしたくないと思っているし、この店がよいと感じたときの自身の嗅覚を信じているから、ここに行くことにした。

国道244号線から道道774号線に入る。オリジナル・フラッグありとTMに書かれているホクレンで給油をした。フラッグは残念ながら品切れとのこと。しかし私のTMは2007年版だから、オリジナル・フラッグはもうあつかつてないのかもしれない。

河亭は中標津のメインストリート沿い、町の中心にあった。建物は年季の入った風格のあるものだ。入口に料理のサンプルがならんでいてどれにするか迷うが、私のメモにはステーキ、ビーフシチュー、中標津牛、とあったのでビーフシチューにすることにした。じっさいにはお得なランチがあったので、ビーフシチュー・ランチ1365円だ。



ビーフシチュー・ランチ コーヒーがつく

料理は5分ほどで提供された。この手際のよさはポイントが高い。貧乏性の私は待たされるのが嫌いなのである。ビーフシチューは見るからに美味しそうだ。さっそく食べてみると一口目はかなりうまい。濃い味つけなので、食べすすめてゆくと、くどく感じるがレベルは高かった。

料理には満足したが、後から入ってきた男ふたりが、私の隣りの席にすわり、タバコを吸いだしたのには閉口した。ここは食堂で喫煙するのが当り前の土地なのかもしれないが、時代は嫌煙、禁煙である。ランチ・タイムくらいは禁煙にすべきである。せっかくのランチが台無しになってしまった。

河亭をでると暑い。またしても日差しは強く、ジリジリと肌を焼き、汗がでる。距離はあるが足寄峠にある3本の林道を走りにゆこうと思う。時間的にきびしいが、今日走破してしまえば効率がよいと考えたのだ。ただ夕刻になると熊に会う確率が高まるから、遅くなったらやめるつもりだった。

道道13号線から国道243号線とつないで弟子屈にむかってゆくと、多和平の看板があらわれた。林道に行くつもりだったが多和平には寄ってゆきたい。時間がなくなったら林道は明日にすればよいのだ。

多和平について展望台にのぼってゆく。一帯には芝生が張られていてキャンプ場になっている。景色はよいがトイレは売店の横にしかないし、気持ちよく野営しようとして丘の上にゆくほど、荷物を苦勞して運ばなければならないから、私は利用する気になれない。しかし見晴らしはすばらしい。開陽台よりも広く、遠くまで眺め

ることができる。これだけひらけていると、気持ちも清々した。



多和平からの風景 多和平は広大な牧場

急いで足寄峠に行くことにするが、信号待ちでとまるとエンジンから焦げ臭いにおいがする。私のバイクは古いので（1990年製）、エンジン・オイルが減ってしまうのだ。オイル上がりを起こしていて、オイルがガソリンといっしょに燃えてしまっている。これをオイルを食う、と言うのだが、エンジン・オイルが少なくなるとエンジンが過熱して焦げ臭くなってしまふのだ。点検してみると、オイル量はロー・レベルを下回っているから補給しなければならない。こうなることはわかっているから、ワコーズのオイルを持参している。足寄峠にゆくのはやめて、和琴にもどりオイルを補充することにした。

和琴のキャンプ・サイトでオイルの補給をする。オイル缶から直接エンジン・オイルを注ぐことはできないので、500mlのペットボトルを切って注ぎ口をつくり、それを使って補充する。1リットルのオイルを入れるとオイル量はハイ・レベルを回復した。

作業をしているとホンダ・ゴールドウイングのサイドカーがやってきた。このサイドカーは見たことがある。昨年、美深アイランドで会った人だ。あの日は朝から林道ツーリングにゆき、昼すぎに美深アイランドにもどってきて、他のキャンプ場に移動しようとしていた。そのとき隣りにやってきたのがこの人で、話しかけられたのだが、貧乏性で気が急いでいた私は、会話にのらないで早々に出発したのだ。

サイドカー氏は私のことを覚えていないようだ。よほど話しかけようかと思ったが、まだ次の予定をこなす時間はあるし、夜にいくらでも会話できるだろうと考え、会釈だけにしておいた。一方で近くにテントを張っているハーレー氏がのんびりと過ごしているのが目につく。ハーレー氏はまわりのキャンパーの世話を焼いている人みたいだった。

足寄峠にゆく時間はなくなったので、津別峠と美幌峠にのぼって景色を楽しむことにした。津別峠にのぼってゆくと霧がわきだした。これでは風景は見えないなと思ったが、とにかく峠にむかう。道はコーナーの連続する気持ちのよいワインディング・ロードだ。カーブを次々にぬけてゆくが、自分で乗れているなと思う。毎日林道を走っているとほんとうに乗れてくるのだ。肩からコーナーに入り、コーナーリング中はバイクをコントロールしきっている実感があつた。

津別峠は思ったとおり霧で何も見えなかった。それでも峠をくだってゆくと霧が晴れ、屈斜路湖がのぞめる

ポイントがあった。つづいて美幌峠にすすむ。美幌峠への上りもコーナーを楽しんでゆく。バイクを寝かし込んでタイヤのサイドを長くつかって走る。美幌峠も霧で何も見えないだろうと思っていたが、津別峠からわずかに離れたただけなのに、こちらは晴れていた。屈斜路湖と中島、それに和琴半島がよく見えていた。



美幌峠から屈斜路湖を見下ろす 真ん中が中島 右に和琴半島

美幌峠は中国人が多い。中国人は自己中心的でうるさいから嫌いだ。写真をとってバイクの元にもどると関西ナンバーのスズキ・ジェベル氏がいる。ジェベル氏は私も行きたいと思っていた、別海ふれあいキャンプ場にむかうそうだ。時刻は17時で、100キロの距離があるから、日が暮れてしまうがゆくとのこと。私も利用してみたかったが、時間がないので和琴にしたと彼に話した。ジェベル氏は私のDRを見て、650はパワーがあって羨ましいと言う。たしかに250は走っていてきびしいときがあるよね。

ジェベル氏よりも先に走りだす。最後に屈斜路湖畔林道を走破することにする。夕暮れ時になって熊に会う確率は高まるが、もっと予定をこなしたいと思う貧乏性に負けたのだ。



夕暮れの屈斜路湖畔林道

17時すぎに林道に入った。国道はまだ明るかったが、林道は森の中をゆくので薄暗くなっている。熊の不安を押し殺してすすんでゆく。入口には林道は14キロと書いてあったような気がしたが、じっさいはもっと長かった。

林道は走りやすくガンガンと飛ばしてゆける。50キロから60キロで巡航した。暗くなった森では三度鹿に会った。一度は立派な角を持つ雄とほっそりとした雌のペアだった。道に寝そべっているキツネもいた。こいつはお腹がいっぱいだったのかくつろいでいた。熊は気配さえなかった。ただ出会いたくないので、ブラインド・コーナーではクラクションを鳴らしていった。

暮色が濃くなると焦りがつのる。ストレートがあるとアクセルを一気に開けてしまう。あまりにスピードを出しているのでは、落ち着かなくてはと思い、森が切れて明るくなったところで止まり、写真をとったりした。

TMには22キロとあるがトータルで24キロ走って林道の出口についた。ホッとしてバイクをとめ、メモをつけるがエンジンはアイドリングせずにストールしてしまう。その後も書きものをつづけていると、森の中から、ガサツ、ガサツ、と動物が歩く音がするので、気味が悪くなってその場を立ち去った。

川湯のレストラン、オーチャード・グラスで夕食をとろうかと考える。キャンプ仲間のマサさんのおすすめのお店なので。しかし川湯はお祭りで交通規制がかかり、オーチャード・グラスの前を通ることはできなかった。

摩周温泉のホクレンで給油をした。昨日につづいて今日もスーパー・フクハラに入り、カツ丼を半額の199円でゲットした。刺身も50%オフの299円だ。それにサッポロ・クラシック。ほんとうは半額の花咲ガニに惹かれたのだが、カニは食べるのが面倒なのでやめておいた。

テントにもどると隣りとの狭いスペースにW400のライダーがテントを張ってしまっていた。左右のテントとは5メートルほどの距離をとっており、右側には入られないように椅子を置いておいたのだが、左は対策をとっていなかった。しかし他に広いスペースがあるのに、どうして人のすぐ横に設営するのだろうか。その感覚が理解できない。そのWのライダーはテントの中にいるのか、物音もしなかった。



半額大好き

テントの横の椅子にすわり刺身で飲みはじめる。蚊がうるさく寄ってくるから蚊取り線香をつけた。日中に2度露天風呂に入っているから入浴はもういいだろうと思う。夜になったら話しかけようと思っていたサイドカー

氏はテントの中で本を読んでいるようだ。ハーレー氏は湖畔のジャリにはまった、若者のニンジャ250を引き出すのを手伝っている。ジャリが深いから気をつけろよ、と言いながら。

刺身だけで腹がいっぱいになってしまった。それでもカツ丼を食べると美味しい。安いから肉は脂身ばかりかと思ったらさにあらず。しっかりした豚肉で味つけもよろしい。最近味わったカツ丼の中でいちばんだった。フクハラ、やるじゃないか。

食事を終わるとテントに入りメモをつけつつ焼酎をやるが、カツ丼を食べたら酔いがまわらなくなってしまった。いつまでたっても眠くならない。そこで23時になって露天風呂にゆくことにした。



昼の露天風呂 湖畔にある

ランプを提げて和琴半島の付け根にある無料の露天風呂に歩いてゆく。真っ暗な道には誰もいない。ひとりくらい風呂につかっているだろうと思ったが、いないので私の貸し切りだ。体を洗ってサッパリしたが、ひとりで漆黒の露天風呂にいるのは不気味で、早々にテントに引き上げた。



駐車場で車中泊する人

5時に起床した。今朝も夜明けからカラスがうるさい。昨夜は露天風呂にゆったりしてあまり寝ていないが頭はスッキリしている。起きぬけに隣りにある国設の和琴キャンプ場を見にゆくことにした。国設は整地された土地につくられた野営場だ。湖に面していないから景色がよくないから空いている。しかし料金は50円安く、1泊400円だ。どちらにするかは好みだろう。私は湖畔をえらぶが、あまり混んでいるなら国設にするかもしれない。国設は25年度は工事のため休みになるそうで、26年度から営業するそうだ。

湖畔と国設のキャンプ場のあいだには広い駐車場があり、ここで車中泊をしている人やゲリラ・キャンプをしている者がいた。ワンボックスカーにカヌーの道具を満載している上の画像の男性。車に釣り道具を積み込んでいる男。バンの横にショーナンボーイと書かれたバケツがあり、どんな人がいるのかと思ったら老人がでてきたりした。そしてゲリラ・キャンプをしているスーパー・カブの旅人。セダンの中で荷物に埋まって眠っている青年。皆さんとても個性豊かで生活感いっぱいだ。それを見るのが楽しい。



冷麦の朝食

昨日半分たべてのこっていた冷麦で朝食にする。安くて美味しくて手間がかからず大満足だ。6時25分に昨日いけなかった足寄峠にむけて出発する。和琴から走りだすと霧が深い。霧の林道では熊の警戒心が薄れて、出会う確立が高まると思えて気になった。

国道243号線を弟子屈にむかうと、角の大きな堂々とした雄鹿が車にはねられて死んでいた。それをカラスがつついてる。交通量の多い国道の脇でこの状況は放置できないと思うが、朝早いから行政は対応できないだろう。こんな時は、地域の動物の処理に強い人が呼ばれるのだろうか。



足寄峠の林道入口 右に国道

阿寒湖にむかうが霧は深いままだ。しかし足寄峠まで距離があるから、そのうち晴れてくれるかもしれないと思っていると、望んだとおりになった。標高があがると霧の上にてたようだがラッキーだった。太陽もでて絶好の林道ツーリング日和となる。和琴をでて1時間で阿寒湖につき、その10分後に足寄峠の林道入口に到着した。ここから西のカネラン峠方向に、3本の林道が平行して走っている。それを北から順に、行って、もどって、また行って、と走破するつもりだった。



上足寄林道 急坂深ジャリ

林道は浮きジャリの走りにくいダートだった。入ってゆくとすぐに丁字路があり、右が上足寄林道で左が39線沢林道となっている。北にある上足寄林道16.5キロで西にむかい、39線沢林道でここにもどってくるつもりだった。しかし足寄林道は急坂の深ジャリだ。ジャリの粒も大きく、見るからに走りづらそうだから、すぐに戦意喪失した。私は林道は好きなのだが、深ジャリは苦手なのだ。昨日も虹別林道の途中にあったボンベツ林道が深ジャリだったから走行するのをやめている。今回のツーリングではある深ジャリ林道を走破することがテーマになっているのだが、そこ以外では無理をしたくない気持ちだった。



39線沢林道 嫌な予感

上足寄林道をゆくのはやめることにし、39線沢林道で西へ走り、南にある35線沢林道でもどつてくることにした。39線沢林道も浮きジャリの走りづらいダートだった。道はゆるやかに下って行って、時々森をぬける。車が通った跡はあまりなく、路面には草が生えていた。そして森が暗く、なんだか嫌な予感がするのだ。この土地が私にフレンドリーではなく、不吉なことが待っていそうな気がする。私は靈感はないのだが、たまにこんな感覚をおぼえるときがあり、その時はそれを信じることにしている。39線沢林道は5キロすすんだところで引き返すことにした。

考えてみると前回ここに来たときも走行を断念したのだ。あの時はまず南の35線沢林道に入ったが、フカフカの土砂が敷きつめてあって走りづらくてやめ、39線沢林道に転進したが同様だったため撤退した。なんだかここは験の悪いところだ。そういうところってある。そういうところには近づかないことが得策だと思う。

屈斜路湖を拠点としてまわる予定だった林道探訪は終了した。和琴にもどつて次の場所に移動することにしたが、双湖台があったので立ち寄った。展望台からはオンネトーとパンケトーが見える。素晴らしい景色だが、何十年か前の大学生のときにもこの風景をながめていて、そのときは大したことがないなと感じた記憶がある。こんなに美しいのに。若かったからだろう。ありきたりの山や湖だと思ったしまったのだが、今は魅せられてしまうほどの山景だった。

双湖台から下ってゆくとまた霧となった。標高の低いところは霧のままなのだ。霧の中は涼しい。長袖シャツの上にジャケットを着ているが肌寒いくらいだ。死んだ鹿はいなくなっていた。路上に何の痕跡もなく消えてしまっている。誰かが片付けたのだろうか。それとも拾っていったのか。長野のある山間の地域では、交通事

故で死亡した鹿を回収して食べると聞いた。血がまわってしまって美味しくないのである。しかし、角や皮だけでも拾う価値はあると思う。



双湖台からの風景 湖はパンケトー

9時10分に和琴に帰ってきた。キャンパーは移動したり、どこかに出かけたりしてほとんど残っていない。そんな中でサイドカー氏は読書をしていて、ハーレー氏ものんびりとすごしていた。撤収を開始するとハーレー氏が話しかけてきた。どこに行ってきたんですか、と。阿寒湖の先にある足寄峠にある林道ですよ、と答える。ハーレー氏は長髪で顎鬚をたくわえ、彫りの深い顔立ちをしている。私よりも少し下の人だ。

ハーレー氏とは話してみるとじつにウマがあった。彼は毎年この時期に神奈川からやってきて和琴に連泊しているようだ。私が林道を走るために北海道にきたと言うと、氏はホンダXLRという250のオフロード・バイクも所有しているそうで、それで和琴にきたことがあり、その時は岩間温泉にいたり、屈斜路湖畔林道を走ったりしたとのこと。

ハーレー氏と話しているとツーリングとキャンプの話題がつきない。いっそ今夜もここに泊まってハーレー氏との会話を楽しもうかと思うが、旅の日程はかぎられている。残念だが出発の準備をつづけた。

ハーレー氏に西興部のキャンプ場にゆくつもりだと話す。キャンプ仲間の「おとう」に教えてもらったのだが、この野営場には居酒屋があるのだ。こんなに私にふさわしいキャンプ場はないから、どんなところなのか、いかなる飲み屋なのか、たしかめたいと思っていた。そのキャンプ場を知っているかハーレー氏に聞いてみると、知らないとのこと。しかし彼はキャンプ場ガイドを持ってきてくれて、調べてくれた。それによると西興部のキャンプ場の近くにはスーパーとコンビニがあるそうだが、居酒屋があるのかどうんまではわからないとのこと。しかし無料なのはまちがいがなかった。

サイドカー氏に話しかけようかと思ったがやめておくことにした。ハーレー氏が旭山動物園から脱走したフラミンゴが紋別のコムケ湖にいるから見物してゆけば、と教えてくれる。新聞を買ってきて読んでいたらでていたそうだが、旅先で新聞を購入して読むというのも、貧乏性の私にはできないことである。

ハーレー氏と別れるのは残念だが出発することにする。私の運営しているHPやブログのことを話そうかと思ったが、口にすることはできず、またどこかで会えるかもしれませんね、とだけ言って走りだす。8月の末に和

琴にゆけば、また彼に再会することができるだろうから。



ハーレー氏のバイクとテント

美幌峠は深い霧だった。風景はまったく見えないから、昨日のうちに来ておいてよかった。霧がでていたのは峠の頂上だけで、山を下ってゆくと晴れ、太陽があらわれる。気温は26℃と快適だった。

北見にはいると暑くなった。日差しが強くなり、ジリジリと焼かれるような酷暑にもどってしまう。Tシャツの上に長袖シャツを着て、ジャケットをつけていたが、長袖シャツを脱いだ。

北見では2001年にお世話になったバイク屋をみつけないかと思っていた。2001年のツーリングの終盤でタイヤが消耗してしまい、交換が必要だと思ったのだ。それで北見のバイク屋に飛び込んだのだが、そこのご主人と奥様がとても親身に対応してくださり、タイヤを手配していただくことになったのだが、いざタイヤを見てもらうと、まだ走れることがわかったのである。つまりは私の早とちりだったのだ。これなら東京まで十分に帰れる、とご主人に言われて、ただただ恐縮したのだった。

そのバイク屋をさがすがわからない。北見に入っていって最初のバイク・ショップだったのだが、それらしい店はなかった。バイク店は2件あったのだがレイアウトがちがう。建て替えたのだろうかと思ったが、入ってたしかめることまではしなかった。

これから進むルート上にリスト・アップされたレストランはないかと見てみると、遠軽の手前の安国というところに「のぶりん」というラーメン屋がチョイスされていた。こんな田舎にチェックした店があるとは驚いたが、それを知ると是非ここに行きたくなった。なんだか縁を感じるから。

国道333号線で安国にむかう。この道は昨年も遠軽から能取湖へと逆方向に走ったルートだ。遠軽は大きな町だったが、その手前に安国の集落はあっただろうかと思いながらゆくと、意外にも人家がたくさんある。失礼だが安国にこんなに人が住んでいるとは考えていなかった。しかし店はあまりない。ここに評判のラーメン屋があるのだろうかと思いながら駅前にさしかかると、そこだけ車が停まっていたにぎわっているところがある。それが「のぶりん」だった。

のぶりんには客がたくさん入っていた。お店の女性に何がいちばん人気があるのか聞くと、焦がし醤油ラーメン700円とのこと。それとミニ豚丼300円を注文した。焦がし醤油ラーメンは焦がし醤油の独特の風味のあるもの。豚丼は甘口の仕上がり。どちらもボリュームたっぷりだから、ミニ豚丼はいらぬほどだった。のぶり

んは発展途上だが研究熱心でやる気のある店だった。こういうお店は応援したくなるよね。



のぶりんの焦がし醤油ラーメンとミニ豚丼

遠軽から北上してゆくと、フラッグあります、の看板をだしているホクレンがあり、フラッグの色が青であることを確認して給油をした。ホクレンにあるライダー用フラッグは地域によってカラーが変わるのである。これでグリーンとブルーのフラッグを手に入れた。

気温が上昇して暑さが耐えがたくなってきた。Tシャツの上にジャケットを着ていたが、上湧別チューリップ公園の前で脱ぐことにする。その代わりに長袖シャツをつけた。季節はずれのチューリップ公園は閑散としていて、はじめは閉鎖された公園なのかと思った。看板がでていてそれと知ったが、この暑気の下では公園に来る人などいないのだ。

長袖シャツで走ると風がぬけて涼しい。首が無防備になるから虫の衝突が心配だが、そうも言っていない暑さだった。オホーツクにでてフラミンゴのいるコムケ湖を通過する。フラミンゴに時間をつかうような私ではない。貧乏性ライダーは先をいそぐのだ。しかし暑い。オホーツクにできれば気温も下がるだろうと思ったのだが、そうはならなかった。



紋別カリヨン広場 ノコギリザメの角？

オホーツク沿いにでるとライダーが急増した。今までほとんど会わなかったのに、次から次へとやってくるから、ピースサインをだすのが忙しいほどだ。ライダーのいるところはかたよっている。内陸にもよいところはたくさんあるんだが。

紋別の道の駅にいて巨大なカニのハサミのオブジェを見物する。紋別には何度も来ているが、これを見たことはなかった。手前にあったカリヨン広場のノコギリザメの角？ といっしょにカメラにおさめる。ここもものすごく暑く、日差しの下にいるのが辛いほどだった。

ここで札幌ナンバーのタンデム・ライダーに声をかけられた。30くらいの男だ。
「覆面がいるから、注意したほうがいいよ。捕まると気分悪いから」

そんなことは先刻ご承知だ。それより、初対面で挨拶もなく、いきなりタメ口で、上から目線のことばは何なのだろう。こんな無礼な人間には会ったことがないぜ。つけくわえておくと、親切心で言っているニュアンスではなかった。

紋別にビジネス・ホテルがあれば泊まって飲み歩くのもいいなと思っていた。西興部のキャンプ場にある居酒屋も気になるが、とりあえず町の中を探索してみると、ホテルは2、3件しかなく、しかも入口に慶応大学陸上部様、駒澤大学駅伝部様などとたくさんの大学の名前の書かれた看板があり、とても宿泊できそうにない。しかし今年の北海道は異常に暑いから、合宿にきた学生も困っていることだろう。

思いのほか飲み屋街が大きく、町中にカニを茹でる匂いのする紋別をでてゆく。すると耐えがたかった暑気は少しずつゆるんでいった。興部から国道239号線で内陸の西興部にむかう。西興部の町の中心にある西興部森林公園にキャンプ場はあるのだ。

公園には16時20分に到着した。芝生の広場と遊園地があるが、誰もキャンプをしていないから、どこがサイトなのかわからない。公園事務所でたずねてみると、芝生の張ってあるところならどこでも幕営してもよいとのこと。屋外ステージの裏にノートがあるので、そこに住所と氏名を書き込めば手続きは終わりだそうだ。



西興部森林公園キャンプ場 奥のとんがり屋根が居酒屋はるちゃん

気温は29℃だった。これまで暑くてたまらなかったから快適に感じられる。キャンプ場のすぐ隣りにレストランがある。森のレストランと書いてあるが、これが居酒屋のようだ。駐車場に千葉ナンバーのワンボックスカー

の方がいた。リタイヤした感じの65くらいのご夫婦だ。今夜はここで車中泊されるとのこと。とても気さくな方たちで、一晩だけよろしくね、とおっしゃり、気持ちよく話をさせていただいた。

居酒屋の前にテントをたてた。遊園地の係員さんがキャンプ場の管理もしていて、風呂のある町営ホテルの場所やそこにあるレストランのことを教えてくれる。居酒屋のことをたずねると、わざわざお店にいて今夜は18時から営業と聞いてきてくれた。



荷物を満載した軽バン・キャンパー

テントの横にベンチがあり、そこでメモをつけていると千葉ナンバーの軽バンがやってきた。乗っているのは70過ぎのご夫婦だ。車中泊なのかと思ったらテントを張りだした。軽バンには荷物がたくさん詰め込まれている。何をこんなに積んでいるのだろうかと思って見ていると、小型のエンジンがある。あれはなんなのだろうか。

町営ホテルに入浴にゆく。料金は400円だ。公園の管理人さんの言っていたとおりレストランもあり、地元の食材をつかったメニューがならんでいた。風呂では軽バン氏といっしょになった。車の中にあったエンジンはモーター・パラグライダーのものだそう。これで飛ぶために北海道に来ているというからすごい。地元の千葉でも飛行しているそうだが、いろいろとうるさくて自由にやれないとのこと。まず露天風呂のある施設の上は飛ぶなと苦情がくるそう。何十メートルも上空だから、人の裸は見えないと説明しても聞いてくれないとのこと。それはそうだろう。また海岸ではコアジサシの繁殖を阻害するからやめると抗議を受けたそう。これで鳥の繁殖期は飛行できなくなってしまったそうで、自由を謳歌しているように見えるパラグライダーもそうではないことを知った。しかし穴場の無料キャンプ場には旅好きのユニークな人が集まる。私もそのひとりだが、それにしても軽バン氏、失礼ながらお年なのにとってもパワフルに旅をしている。私もこんな老人になりたいものである。

風呂をでて西興部の町をあるく。コープと酒屋兼総菜屋、それに古い昔ながらの食堂とセイコーマートもあった。これだけ便利でキャンプ場は無料なのだから言うことはない。野営場にもどって目的の居酒屋――はるちゃん、という名前だった――にゆく。まず生ビールをたのみメニューを見た。刺身をえらびたいが単品で500円～600円とお高い。格安オヤジ酒場で飲んでいる私の相場は350円～400円なのだ。それでも500円のメサバを注文すると品切れで、しからばサラダがよかろうとラーメンサラダをチョイスした。



はるちゃんにて ツボダイとラーメンサラダ

窓の外には私のテントがたっている。それを見ながらビールを飲むのは不思議な感じだった。ラーメンサラダがきた。これはサラダではなく、冷し中華ではないのか。冷し中華の具をサラダにしたものだ。

焼き物にツボダイ600円がある。ツボダイは高級魚だからこれはお得だ。さっそく追加する。ツボダイは脂がのっていて美味しいが大きい。それに冷し中華だから、ビールをお替りしたら満腹になってしまった。これで切り上げることにする。はるちゃんには客が途切れずに入ってきていた。この町に飲食店は古い昔ながらの食堂とホテルのレストラン、それにここしかないから、居酒屋スタイルのはるちゃんは貴重な存在なのだろう。

店をでてすぐ前にあるテントにもどってゆく。なんだか妙な感じだ。テントに入って焼酎を飲んでいるといつの間にか眠っていた。トイレに行きたくなって眼を覚ますと、はるちゃんはまだ営業中で客が入れ替わっている。高級車で来ている、やけに態度の横柄な若夫婦がいたりする。いくら客だと言っても、小銭をつかうくらいでそんなにえばるなよと思う。そんな風景を見てまたテントにもぐりこんだ。

第六章 6日目 深ジャリ林道をリベンジ

5時に起床した。ここもカラスがうるさい。夜明けとともに鳴きだすからやかましくて寝てられない。カーカーといろいろな音程で鳴き、それが不協和音だし、ついには金切り声のようなカーをだす奴もいるからたまらない。起きだしてトイレに歩くがここは遠いのが難だ。200メートルは離れているから我慢するのがたいへんだった。

カップ麺の朝食をとるが風が強い。昨夜から吹いていたので、ヌプカの教訓を生かしてテントのペグをすべて打っておいたのだが、作業のためにジッパーを開けたままにしておいたら、風をはらんでひっくり返ってしまった。まただよ。軽バン氏が見ているから恥ずかしいから急いで立て直した。



廃道化している林道

今日は連泊して林道ツーリングをする予定だ。チェーンに埃が付着しているので、掃除と注油をして6時12分に出発した。気温は27℃。国道239号線で内陸にむけて走り、奥サンル林道を目指す。はじめて行く林道なので入口をさがしながらすすむ。TMには一の橋付近から入ってゆくようになっているが、曖昧な表記だ。そこで導入路らしきものがあればチェックしてゆくことにしたが、はじめにみつけた林道は廃道のように、一の橋の集落に入ってみても山につづく道はなく、なかば諦めながら先へゆくとそれらしき道路があった。「下川木工場作業場」とでている。「緑水荘3.6キロ」ともあり旅館かと考えた（帰ってから調べてみると、北海道電力の社長をつとめた人物の別荘だった）。

この道に入ると2キロほどで舗装が切れてジャリ道になり、林道の入口についた。ゲートはあるがチェーンははずしてあり、立ち入り禁止の札がかかっている。ただし誰の名において通行禁止なのか記されていない。バイクをとめて看板を見ていると、ワンボックスのバンが横を通りすぎた。道のことを聞きたいと思ったが、運転手はジロリと私を見ていて嫌な感じである。車内には4・5人の男が乗っていて木工場にゆくようだった。

立ち入り禁止とあるし、男たちの態度は友好的なものではないので引き返すことにした。誰もいないなら入ってみるが、ストレスの溜まっていそうな男らがいるならトラブルになりそうで嫌だ。彼らに注意されたり怒鳴られたりするのはいっ平だし、そうなったらこちらも言い返すから、誠に不快な思いをすることになる。道には町

道一の橋然別線とでていたが、ここが奥サンル林道の入口のようだった。



奥サンル林道の入口

風が強いからテントが心配だ。しっかりとペグを打ち、ジッパーもきっちりと閉めてきたから大丈夫だと思うが、突風が吹いているのを見ると不安になる。しかし案じてもどうにもならないから気にするのはやめた。

下川から道道260号線に入って北上してゆく。国営草地開発サンル牧場という看板がでていて、国はこんなことまでやっているのかと驚いた。道道の右から奥サンル林道がぬけてきているはずなので注意してゆく。林道は何本かあったがすべて工事中で閉鎖されていた。そしてどれが奥サンル林道なのかわからなかった。TMによると奥サンル林道は、走りやすい31キロ、とのこと。残念だ。



奥幌内本流林道

幌内越峠にあるピヤシリ越林道の入口にむかう。ここは神門の滝入口と看板がでていてから迷うことはない。林道は奥幌内本流林道が8.5キロ、その先にピヤシリ越林道が21.5キロつづき、全長30キロとなっている。じつは今回のツーリングでピヤシリ越林道がいちばんの目的地なのだ。2007年にここを逆方向から走

ったのだが、急坂の深ジャリのひどい道で、トラウマになるほど苦労した。何度も引き返そうと思ったし、2度も林道から飛び出してしまう、危ない目にもあった。ここは私が走った中で最悪の林道なのだ。そのトラウマと恐怖心を克服するためにここにやってきたのである。

7時45分に林道に入っていった。肩に力が入っているし不安でもある。神門の滝まで7.4キロとでている。フラットだが穴ぼこが多く、水たまりになっているダートをゆく。穴をよけてゆけば走りやすい道だ。7キロすすむと分岐があり、左が滝で右がピヤシリ湿原登山口となっている。2007年に神門の滝を見ていた。滝へは本線をそれて支線でゆくののである。そこで滝方向ではなく湿原にすすんだが、これが間違いだったのだ。



ピヤシリ湿原登山口にむかう林道

分岐を右に折れると路面は一変した。道の真ん中には草が生えていて、除草もされていない荒れた林道になった。最近ジャリを入れたようだが車はあまり走っていない。神門の滝にゆく支線はもっとガタガタだったし、ここからピヤシリ山の登山口までは交通量が少ないから、こんなものかと思ってすすんでいった。

カーブをぬけると鹿がたっていた。雄鹿は森の中に逃げてゆく。道は更に悪くなった。路肩の草を刈ったものがそのまま放置されて枯れ、すさんだ雰囲気だ。そしてついに宿敵の急坂と深ジャリがあらわれた。コイツをやっつけるためにここに来たのだ。

急坂の深ジャリコーナーはローでゆく。タイヤが路面をつかまえきれずに空転する。たえずハンドルをとられるから、バランスをとりながら走った。やがて深ジャリにも慣れてきた。スムーズに走行することができる。いける、いけるぜ。やがて坂を登りきると狭い広場にでて、行き止まりとなった。ピヤシリ湿原登山口とあり、湿原まで2.5キロとでている、山の中に登山道がのびている。風は強く吹きぬけ、誰もいない。ここではじめて道を間違えたことに気づいた。私が行きたいのはピヤシリ山登山口であってピヤシリ湿原登山口ではない。ピヤシリ山の登山口から山頂まで歩くのもいいなと思っていたから勘違いしてしまった。それに考えてみたら、いくらなんでもこんなにひどい道のはずもなかったのだ。



行き止まり ピヤシリ湿原登山口 看板の奥に登山道がのびている

5キロの荒れた林道をもどってゆく。間違えなかったらこんなにハードなダートを走ることもなかったから、よい経験をしたのかもしれない。ミス・コースはしたが森はフレンドリーなので不安はなかった。深ジャリに慣れたから、この先のピヤシリ越林道もいけそうな感じだ。



ジャリの入った路面 ここは深ジャリではない

正しいルートにもどった。こちら道真ん中に草が生えているが、道幅は広いし車の走行した跡がある。深い森の中をすすんでゆく。見通しのきかないカーブでは獣よけにクラクションを鳴らしていった。風が強い。木々がざわめく。やがて深ジャリがあわられた。しかし間違えてはいった林道に比べたらジャリは深くないし、それに深ジャリに慣れてしまったから問題なく走れる。これでトラウマは克服した。リベンジ完了だ。しかし2007年は荷物を満載してここを走破したのだ。キャンプ道具を積んで走るのはきびしいルートだから、我ながらよく走り切ったものだと思う。

2007年にここを悪戦苦闘しながら走っていたときに、後からやってきたライダーにあっという間にぬかれた。バイクはヤマハTDR250で、オフロード・バイクというよりモタード・タイプのモデルだ。TDRは空荷だったが、私を右からぬくと、深ジャリの路面を右から左にもどり、その過程で前後のタイヤがスライドしたが、ライダ

一はじつに易々とバイクをアクセル・ワークと体重移動でコントロールし、走り去っていった。私にはそのライダーが達人のように見えたが、その彼に少しは近づけたらどうか。



ピヤシリ越林道のストレート

林道は森林限界をこえてやがてピークにいたった。木がないので風が強い。路面はずっとジャリがはいっている。ときに深ジャリだ。頂上をすぎてくたってゆく。絶えずハンドルをとられるから手を軽く添えるだけにして、遊びを大きくとり、安定したリズムで走る。深ジャリでもストレートは飛ばす。強気にゆけないところはスピード・ダウンし、ときにギヤをローまで落として慎重に走行した。



名寄の町や山々を見下ろすビュー・ポイント

名寄の町を見下ろせるビュー・ポイントに到着した。ここがピヤシリ越林道のいちばんの見所で、ピヤシリ山周辺の山塊と名寄の町を見渡せることができるのだ。バイクをとめてしばし風景を楽しんだ。もちろんバイクはアイドリングせず、エンジンは止まってしまった。

ピヤシリ山の登山口から山頂まで2キロなので歩いてみるつもりだった。しかし着いてみると強風のため登山者はひとりもいない。たしかにこの風では危険だから私もやめておいた。

ジャリダート、深ジャリ、たまに舗装路があらわれる林道をくだつてゆく。2007年よりも舗装区間が長くなった感じだ。やがて道の斜度が落ちると広くてフラットな、ジャリのないストレートとなり、ここはとても走りやすいからガンガンと飛ばしてゆく。ハイ・スピードのダート走行を楽しんでいるとサンピラスキー場にでて林道走行は終了した。

9時45分にスキー場のジャンプ台の前にバイクをとめた。ミス・コースをした5.4キロの往復10.8キロを足して40.8キロの林道走行だったが、かかった時間は1時間40分で休憩はとらなかった。バイクがアイドリングしないから、止まるとキックでエンジンをかけなければならない。それがわずらわしいから休まなかったのだ。写真をとりたいときだけ停止し、その度にエンジンはとまってしまうから、キックで再始動してまたすぐに走りだすということを繰り返した。



名寄のひまわり

水をがぶ飲みする。走りどおしで喉が渴いていた。大量の水を一気に飲みながら、ワイルドだぜえ、と自分で思う。こういうのがほんとうのワイルドなんだよ。名寄の町に下つてゆくとひまわり畑の案内がでていたので寄つてゆくことにした。最大の目的だったピヤシリ越林道の深ジャリを走破したし、もう林道を走る予定もないから、心に余裕が生まれたのだ。ひまわりは満開だった。

朱鞠内湖にゆきたいが正しいルートにのれない。名寄の町の東から西にある国道40号線にでたいのだが、思うようにならず右往左往してしまった。名寄にはスープカレーのレストランがリスト・アップされていたのだが、まだ昼には早いので、朱鞠内湖にいった後で美深にある寿司屋にむかおうと考えていた。

国道40号線から道道798号線とつないで朱鞠内湖を眺めることができるPAについた。巨大な湖が人造湖だというのが驚きだが、これを作りあげた日本人の力と知恵にあらためて感心する。すばらしい国力である。朱鞠内湖は複雑な形をしているが、場所によって水の色がちがう。水深が異なるせいだろうか。湖の左右で青色の濃さがちがうのは不思議な光景だった。

美深にむかう。今日はなんだか咳がでる。喉にひっかかるものを感じるが、風邪ではなく旅の疲れだと思う。以前のツーリングでもこんな症状がでたことがあったが、病気ではなかった。私は旅先では気を張っているから、病にかからない性質なのだ。

日本最低気温の氷点下41.2℃を記録したことを示すモニュメント、クリスタルパークに寄つてゆきたかった

が、気づかずに通過してしまった。名古屋大学の観測所の看板はあったが、クリスタルパークのものはなかった。10キロも通りすぎた地点で気がついたので、もどるのは面倒でやめてしまった。

美深の寿司屋につくと休みだった。今日は寿司だと決めていたから肩の力がぬけてしまう。木曜定休とは思ってもよらなかった。だって休みは月曜のはずだから。

こうなったら名寄にもどってスープカレーにしようと思う。しかし国道を走りだすと20キロもあとでているからやめた。たかが昼食のためにそんな無駄なことはできない。美深で食事処をさがすことにした。



むつみ食堂の天ぷら蕎麦

バイクで美深の町を探索してみると、いちばん繁盛しているのは、むつみ食堂という蕎麦屋だった。店の構えがしっかりしているし、地元の方の車がたくさんとまっている。近所の人が集まっている店に外れはないから、ここに入ることにした。

天ぷら蕎麦1150円を注文する。サービスのコーヒーを飲んでいると10分ほどで料理は提供された。蕎麦はふつうだがつゆが美味しい。天ぷらもサクッと揚がっている。これで1050円はお値打ちだ。むつみ食堂は客が次々にやってくる人気店だった。接客も気持ちよかったからまた利用したいと思う。

ここまで来たら函岳にゆくしかない。函岳には去年もいっているが、美深歌登大規模林道17.5キロとレーダー林道10.5キロを走った先にある、巨大レーダーのたつ、函岳の山頂なのだ。函岳は北海道にやってくる林道ライダーの聖地と言ってよいところだと思う。眺望がよく、運がよければ利尻富士まで見ることができるし、長距離の林道を走破することのできる、北海道有数のオフロード・コースだからである。しかもこのダートは走りやすいから、気負いなく入ってゆけるのだ。したがって行きがけの駄賃だとばかりに、ついでに走り散らしてゆこうと、虹別林道を走ったときのボンベツ林道のように考えたのだった。

美深の北で国道40号線から道道680号線に入ってゆく。国道の分岐には看板がたっているからわかりやすい。ただしダートとは書いていないから、案内に誘われて立ち寄った車やバイクの中には、驚いて引き返す者もいるのではなかろうか。

道道をすすむとダートとなった。走りやすい林道のはずが今年は様子がちがっている。ジャリが入れてあり、浮きジャリダートとなっているのだ。しかもなかなか手強い。たぶん去年の台風で傷んだ路面の補修のためにジャリが入れてあるのだと思う。



レーダー林道 山頂にレーダーが見える

いつもは思う存分飛ばせるダートをハンドルをとられながらすすみ、17キロ先の加須美峠についた。ここから左に折れてレーダー林道で函岳山頂をめざすが風がつよい。森林限界をこえているから、木が生えていなくて強風がまともにぶつかってくる。バイクがあおられて怖いほどだ。無理だと思ったら引き返そうと思ってすすんでいった。

レーダー林道も浮きジャリ、深ジャリで走りづらい。斜度のきつい登りではジャリの上で後輪が空転する。熊の糞が2ヶ所にあったので緊張してゆく。古いものなのでまだよかったが、ここは来るたびにヒグマの糞のあるところだ。

函岳山頂につく前から盛大にクラクションを鳴らしてゆく。もちろん熊よけのためだ。しかし山頂の広場には自衛隊の人がたくさんいたので、気まずい思いをしてしまった。



函岳山頂

人がこれだけいればヒグマの心配はいらない。風が強いのでバイクをとめるのに気をつかい、レーダーの裏にある函岳山頂に歩いてゆく。自衛隊のジープの他に都内ナンバーのパジェロがいたが、それに乗ってきた男性ふたりが山頂にいた。晴れているが遠くは霞んでいる。したがって利尻富士は見えない。それでも他では眼にすることのできないすばらしい山岳風景がひろがっていた。



加須美峠からオホーツク方向にすすんだ美深歌登大規模林道

函岳をでて加須美峠にくんだり、美深歌登大規模林道をオホーツク方向にすすむ。ここもジャリが入っていて浮きジャリ、深ジャリで走りごたえがある。しかしピヤシリ越林道からずっとこうなので、ジャリに慣れてリズムよく走ってゆくと、エイブ50とNSR50の若者ふたりが、コンクリート製の橋の上で休んでいるのに出会った。ジャリの上でなく、平坦な橋で休憩している彼らの気持ちがよくわかる。彼らは相当苦労してここまで来たのではなからうか。そしてここから函岳の山頂までは、まだかなりの距離があるのだ。私は彼らの前で速度を落とし、左手を上げて会釈をすると、アクセルを開けて走り去った。橋の先のジャリ道でバイクがスライドすると、アクセル・ワークと体重移動でコントロールして、強引に加速してゆく。彼らには達人に見えただろうか。

加須美峠から10キロは狭くてジャリの入った路面で、その先の7キロは広くてフラットなダートとなった。こうなると飛ばせる。アクセルを開けてガンガンと走る。時速80キロで走行しバックミラーを見ると、砂埃が猛々しくあがっている。これぞ北海道の林道だ。土煙をまきあげながら疾走するのが、北海道のダートの醍醐味である。

美深歌登大規模林道のジャリ道は終わり舗装路にでた。するとすぐに道道120号線にぶつかるので、右に折れて天の川トンネルをぬける。トンネルの出口の近くに風烈布（フーレップ）林道の入口があるので、引き続きこの林道に入った。



風烈布林道

風烈布林道も走りやすいダートだったのだが、ここもジャリが入れてあった。それでも美深歌登大規模林道ほどではないから手強くはない。交通量が少ないせいか、道の真ん中に草が生えている。また強風のため木の枝がたくさん落ちていた。風烈布林道はすすんでゆくとストレートが連続するようになる。真っ直ぐだが狭い林道なので50～60キロで巡航する。鹿の飛び出しと対向車が怖いからほどほどの速度にしておいたが、ミラーを見ると砂埃が盛大にあがっていた。ここにも熊の糞がふたつあった。加須美峠の下りにもひとつあったから、この地域はヒグマの多いところである。

15時10分に風烈布林道の出口についた。林道の終わりは牧場でここで休憩にする。今日はピヤシリ山周辺が40.8キロ、函岳周辺で72.5キロの、合計113.3キロのダート走行をした。よく走ったものだが、北海道はほんとうに林道天国だ。ジャリ道を走らないオンロード派の人たちは興味がないかもしれないが、これを体験しないのはもったいないと思う。



オホーツクにて

牧場のホルスタインたちと記念撮影をして出発した。当り前だがアスファルトはものすごくスムーズだ。ダートを走った後だとそれを実感する。オホーツク海にでると海が美しい。思わずバイクをとめて写真をとるが、通りすぎてゆく地元の車は、何をしているのだろうという顔で見ている。この風景も日常になると何も感じなくなってしまうのだろう。

公衆電話をみつけて職場に電話をする。余っているテレホンカードを使うために公衆電話を利用しているのだ。オホーツクにいるのに暑いと話して電話を切ると、地元の老人が、暑いね、と話しかけてきた。どこを走ってきたのかと聞くので、美深から函岳にぬけるジャリ道を通ってきた、と答えたが、ハコダケ？どこだ、と言う。説明すると、地元の俺の知らない道だな、と笑った。たしかに地元の人はわざわざ不便な林道など使わないし、知らないのだろう。

オホーツク国道のR238を南下してゆく。釣り好きでもある私は海や川があると釣人がいないか注意している。すると小さな川の河口に釣人が5・6人いるのをみつけた。彼らは河口から海にむかって竿を振っている。狙っているのは鮭だと思う。川で鮭をとるのは違法だが、海ならよいと聞いたことがある。川に立ち込んでの鮭釣り、ワイルドだね。

オホーツクを南下してゆくと道の駅おうむがあり、タワー展望台があったので立ち寄った。バイクを駐車場にとめると、ヤマハ・メイトの若者がいる。ナンバーを見ると近くの人なので立ち話をした。メイト君は道の駅のス

スタンプラリーをしているそうだが、歩道を走っているところをお巡りさんにみつけて、切符を切られてしまったとのこと。道の駅に泊まっていて、宿泊費もほとんどかかっていないのに、罰金7000円なんすよ、これってどうなの、と訴えていた。どうして歩道を走ったの？、と聞くと、近道をしようとした、とのこと。メイト君あんまり嘆くので、可哀想なのだが笑ってしまった。



ワイルドな釣人たち

メイト君はスタンプ帳を見せてくれたが、道東地区はすべてコンプリート、道央も！、と言う感じで周辺を制覇していた。私は性に合わないからやらないが、スタンプラリーは人気があるようだ。

タワー展望台にのぼるとオホーツク海とおうむの町が見下ろせた。メイト君はスタンプにしか興味がないようでやったこない。駐車場には首都圏ナンバーのワンボックスカーが2台とまり、両方ともリタイヤ組の男性がひとりで乗っている。リヤ・ゲートを少し空けて風を入れているのも、新聞か本を読んでいるのもいっしょだ。のんびりした旅ができてうらやましいが、なんだか時間を持て余している気配があった。

西興部のキャンプ場にもどることにする。興部の北にある道道883号線で西興部にゆけるようだ。TMを見てみると、牧草地をぬける舗装路、とあるからこの道を利用することにした。

なだらかな牧場の中をぬけてゆくと国道239号線に合流し、16時50分にキャンプ場についた。強風でテントが心配だったが、いささかも乱れることなくきちんとたっている。まだ時間が早いから近くにある鹿牧場にゆこうかと思ったら、バイクが3台やってきた。2台はハーレーのカップルで、もう1台は旅人ではなく、近所の人ようだ。ハーレーのカップルは30くらいだったが、男と眼があったので会釈をすると無視された。こんなことははじめてなのでびっくりしたが、そちらがそうならと、こちらも黙殺することにした。

鹿牧場にゆく気持ちは失せてしまった。バカップルに近くにテントを張られたくないので、メモをつけて見ていることにする。バカップルは離れたところに幕営した。公園の管理人さんが来たので、昨夜居酒屋にいったと報告すると、今夜は是非町営ホテルのレストランを利用してくれと言う。地元愛の強い方なのだ。また管理人さんはライダーでもあるそうだ。

引き続きメモをつけているとキタキツネが道路を歩いてきた。何かをくわえているなと思ったら食パン2枚だ。どこかで盗んできたのだろうかと思って見ていると、居酒屋の奥の森に入ってしまった。そしてしばらくするとまた食パンをくわえてあのキツネがやってくる。今度は2枚ではなく1枚だ。どうやらどこかの家でもらってくるよ

うだが、食パンを2枚、1枚とやるのはきっと老人だろう。キツネはまた森に去っていったが、子供が待っているのかなと思ったりした。

キャンパーがまたひとりやってきた。釣人のようでバカ長をほしている。公園の管理人さんはホテルのレストランを利用してくれと言っていたが、自宅から持ってきたスパゲティーとパスタソースがある。これをそのまま持ち帰るのは嫌だから、今晚の夕食はパスタにすることにした。ナポリタンの大盛りだ。そしてスーパーか酒屋兼総菜屋でもう一品手に入れようと思ってゆくと、スーパーは休みで総菜屋も思うようなものがない。しかたがないからチキンとタマネギのフライを各100円で買った。



パスタとフライの夕食

テントの横でスパゲティーを茹でつつビールを飲む。フライをかじりながら缶ビールをぐびりとやり、芝生の上においたら倒れてしまった。たいへんだ。酒がこぼれちゃったよお。

食後にホテルの風呂にいった。入浴すると体は火照るが外気は23℃とすずしい。しかしテントに入ると暑いから、ジッパーをあけて風を入れながら焼酎を飲んだ。ラジオを聞きながら、野営の夜は更けてゆく。



函岳山頂のレーダー

4時30分に起床した。今朝もカラスがうるさい。少し酒がのこっていて胃の調子がわるかった。それでもカップ麺の朝食をとる。釣人がテントからでてきたので会釈をすると、気持ちのよい顔でうなずいてくれたので、山女ですか？、と話しかけた。すると、やまべだよ、という答えがかえってきた。北海道ではヤマメをやまべと呼ぶのだと思い出す。釣れますか？、と聞くと、釣れる、とのこと。そこで以前やってみたがなかなか釣れなかったと話すと、北海道は釣れる、本流でもポツポツかかるが、沢にゆけば数ができる、とのことだった。

釣人は65くらいの地元の方だった。北海道の河川は細かく規制されていると聞く。釣人にたずねてみると、この川は下流は禁猟だが上流はOKとのこと。熊は大丈夫ですか、と聞くと、熊鈴をつけてホイッスルを吹きながらすすむし、蚊取り線香もつけているから問題ない、とのこと。こちらの存在を知らせるようにすれば、ヒグマのほうは避けるとのことだ。以前に沢で釣りをしていたときも、上流でガサガサ音がしたので見てみると、熊が川をわたっていったそうだ。出会い頭にならなければ大丈夫、バイクで林道を走っていてもまったく問題ないよ、と教えてくれた。

ところで君はご飯食べた？、と釣人は聞く。はい食べました、と答えたが、どうしてそんなことをたずねるのかと思ったら、釣った山女を私にくださると言うのだ。やまべ食べたことある？、と聞きながら魚籠をひらいて釣った山女を見せてくださる。魚籠のなかには12～15センチの山女が4・5尾と、7・8センチの魚が10尾くらい入っていて、大きいやまべをくださるとおっしゃるのだ。私は食事を済ませているし、これから札幌にゆく予定なので丁寧に辞退した。でも、その気持ちがとても嬉しかった。

釣人は沢に入っていった。ハーレーのバカカップルの女がテントから出てきたが、眼もあわせずに出発する。気温は22℃と涼しい。内陸にむかって天北峠をのぼると外気はさらに低下し、19℃となって寒いほどだ。Tシャツの上にジャケットを着ているだけだから、長袖シャツを追加したいほどで、ようやく北海道らしくなった。じつは革ジャンを着てこようかと思っていたのだ。やめておいてよかったが、北海道ツーリングは夏でも革ジャンというのが私の決まりごとだったのだが、それがくずれてしまった。

下川から名寄にぬけてゆく。高速道路を利用するつもりだが入口が遠い。名寄から士別剣淵ICまでかなりの距離があり、こんなに離れていただろうかと思いつつ走る。バイクは今日もアイドリングしない。信号待ちで

はアクセルをあおってエンジンが止まらないようにするが、まったくまいるぜ。

道央道にはいる前に給油をする。昨年度央道でガス欠になりそうになった。GSがほとんどないからである。その失敗を繰り返さないために満タンにしておいた。



札幌 ラーメン横丁

日向はあたたかいが日陰にはいると寒い。日差しが恋しくなるような陽気のなか、道央道を80キロから90キロで走る。速度が遅いのは老輩のDRを気づかっただけのことである。札幌まで距離がある。南下してゆくと暑くなってきた。

眠くなったので音江SAで休憩をとった。バイクからおりて体を動かすと眠気は去ってゆく。キャンプ場からゴミを持ってきたので捨てたいが、ゴミ箱がない。北海道の高速にはゴミ箱がおいてないのだろうか。日差しはさらに強くなり、太陽の下にいるのは辛いほどになった。走りだすと砂川PAがあったので立ち寄るもゴミ箱はない。やはり設置されていないのだ。高い金をとっているのだからゴミ箱くらいおくべきである。北海道の高速道路は客をなめている。

札幌ICをでたところにあつたセブンイレブンでゴミを捨てさせてもらった。お礼に水500mlを98円で買ったが、これではお礼にならないね。今夜は札幌のホテルに泊まって飲み歩きたいと思っていた。そこでかねて調べておいた格安のビジネス・ホテルに電話してみると、3件のリストを用意していたが、すべて満室ですと断られてしまった。今日は混んでいるようだ。

まいったなと思ったら、携帯のバッテリーの残量も少ない。安心してビジネス・ホテルに電話できないほどだ。買ったことはないのだが、コンビニで売っている充電器を手に入れなければならないだろうか考えるが、600円くらいする。買うのはもったいないし、札幌駅にゆけばホテルはいくらでもあるだろうから、飛び込みで1軒くらいはみつかるだろうと考えた。

札幌駅にむかうが相変わらず道路案内のわかりにくい街だ。なぜ他の都市のように「札幌駅」と大きく表示しないのだろうか。近郊の地名ばかりでているから、土地勘のない人間には方向がわからないのだ。

またしても耐えがたく暑くなってきた。都内とおなじような酷暑にもどってしまったのだ。その暑気とわかりづらい標識をのりこえて札幌駅についた。南口にチサン・ホテルとR&Bホテルがあつたので順次飛び込んでみたが、いずれも満室とのこと。今日はほんとうに混んでいるようだ。しかし、宿がとれなければキャンプをする

までだと開き直った。まだ時間は早いし、心当たりの野営場もある。でも携帯がつかえないのが痛い。楽天でさがせばすぐにみつかると思うのだ。それでも充電機を買うのは金が惜しくて嫌なのだった。

駅の北口にまわるとルートイン・ホテルがあった。フロントで聞いてみると、7500円の禁煙室なら1部屋だけ空いているとのことだが、7500円は高い。私のビジネス・ホテル相場は3500ほどで、今日は混んでいるから特別に5000円までなら出してもよいと思っていた。したがって保留にして考えることにした。

じつはボロイ旅館が1軒あったのだ。こちらのほうが絶対に安いと思う。料金を聞いてみるつもりで近くまでいってみると、いくら割安でもこれでは嫌だなと感じる外観。しかもここにはバイクをとめるスペースがない。一方のルートインには500円かかるが駐車場があるのだ。

札幌で飲み歩くのは特別な体験だし、それも今日しかできないから、気持ちよく泊まるために5000円の予算を7500円に拡大することにした。駐車場代をいれて8000円だ。しかしそれで思い出が作れるなら安いものかもしれない。携帯の充電機代が浮いたから8000円-600円で7400円。当初予算の5000円から2400円の増額。いや、駐車場代はどこでもかかるから、2400円-500円で1900円のオーバー。これくらいなら仕方がないなと細かいことを考え、ルートインに部屋をとった。



メンチカツ定食の昼食

チェック・インは15時からとのことなので昼食にゆくことにする。行きたいのは市電のすすき野駅の隣の駅、資生館小学校前駅の近くにある「味処酒房なかむら」だ。地元の方の情報でここのランチが美味しいと聞き込んだのである。

札幌の街はどうも方向がよくわからない。しかも一方通行が多いから、行ったり来たりしてすすんでゆく。やがてこの辺りと思うところでTMを見ていると、市電の駅の近くなんだから、市電についてゆけばよいのだと、今さらながら気づいたのだった。

お店はビルの2階だった。バイクを路上にとめておくのは駐車違反が気になるが、建物にはいってゆく。目的の店舗は小ぢんまりとした飲み屋だった。カツ丼、メンチカツ、トンカツ、ヒレカツがおすすめとのこと、メンチカツ定食650円をお願いする。メンチカツはボリュームたっぷり。揚げたての熱々で大満足だった。

つづいて北海道立近代美術館にゆく。東山魁夷展を見たいと思っていたのだが、以前に葉山にある神奈川

県立近代美術館にでかけた際に、札幌のこの美術館にいつかみたいと思った記憶がある。何を見てそう感じたのか忘れてしまったが、ずっとここを訪ねてみたいと考えていたのだ。



北海道立近代美術館

美術館については金曜日の昼下がりだった。平日なのにたくさんの人で賑わっているから札幌の文化度は高い。東山魁夷の特別展だけなら1000円だが、心にひっかかっているものを見るために常設展との共通券1500円を購入した。

まず東山魁夷展をみる。東山魁夷は単純で深さのない作家だと誤解していた。じっさいは精密に描いた下絵をもとに、対象を単純化していた。大胆に単純化した木や岩や波のフォルムを無数にえがいて画面をうめ、それにグラデーションをかけている。とても感銘をうけた。

東山魁夷の絵を順番どおりに見た後でスタートにもどり、気に入った作品を見直して常設展にうつった。こちらは北海道出身の画家の作品が展示されている。それを見て葉山でここに来たいと思ったのは、片岡球子の絵を見たいと感じたからだと思い出した。片岡の人物画がとても魅力的なのだ。市井の人から歴史上の人物の、葛飾北斎から歌川国芳まで。

常設展には片岡よりも眼をうばわれた作品があった。岩橋英遠という作家の「道産子追憶之巻」という大作だ。北海道の四季をえがいた何十枚もの連作で、熊が冬眠しているシーンから始まり、春がきて、初夏になるとトンボが飛び出す。トンボは次第に多くなり、ついには1枚の絵いっぱいになる。やがて季節はすすむとトンボは少なくなり、ついにはいなくなってまた冬がくるという趣向になっている。北海道はトンボが多い。トンボの国だと思うほどだ。この作品は北海道の原風景のように感じられた。

ホテルの裏の駐車場にバイクをとめ、15時10分にチェック・インするが、ここで重大なことに気づいた。ホテルのカウンターにJAF割引の表示があったのだ。10%引きと。料金の支払いは先刻カードで済ませていたが、7500円の宿泊料を取り消してもらい、1割引の6750円に訂正してもらった。今日のホテル代は5000円のもりだったから、これで1750円差となり、しかも充電池を買わずにすんでいるから1750円-600円で1100円のオーバーということになる。かなり納得のゆく宿泊費となった。

部屋にはいってさっそく携帯の充電をする。シャワーを浴びて着替え、街にでた。南口にまわって札幌駅と周辺の高層ビルをながめる。1981年と1983年の夏に札幌駅でシュラフをひろげて何泊も野宿をした。当時は金のない若い旅行者がたくさん集まっていた、何十人もで眠ったものだった。今はそのことを知らない人も

多いだろう。昔のことを思い出しながら札幌駅前を歩き、あまりにも変わった風景をみつめた。



札幌の夜はサッポロ・クラシックとお刺身でスタート まつ久ら

駅前通りをすすき野にむけて歩いてゆく。札幌は街と人がとても洗練されていて、人々のプライドも高そうだ。北海道の地方を旅していると、貧しい家がならび、経済格差を感じるが、札幌だけは別世界である。



辛口の日本酒と牛タン・舞茸・アスパラのソテー まつ久ら

市電のすすき野駅についた。目的の店をさがしているとラーメン横丁がある。1981年と1983年にここで味噌ラーメンを食べている。店は入れ替わったのだろうが横丁は昔のままだ。当時を思い出しながら横丁を歩いてみた。

ラーメン横丁のすぐ近くに目的の店「北海道料理まつ久ら」はあった。今夜は2・3件はしごをしたいから、和食で上品なこの店を1軒目にえらんだのだ。サッポロ・クラシックと本日のおすすめコース3500円を注文する。ひとりだから一品料理を何点かえらぶより、これがよいだろうと思ったのだが大正解だった。料理はどれも美味しいし器もうつくしい。そして接客もこころがこもっていた。

まつ久らで魚をたべたので次は肉にしよう考え、評判の焼き鳥店の「蔵鷓・きすむ」にゆくも満席。ならばと

人気のもつ焼き店の「野武士」にむかうも、ここも入れなかった。時刻は19時で飲食店がいちばん混む時間だ。これではどこの人気店も入れないだろう。そこで行ってみたい飲み屋リストから、穴場だという「ながおちゃんの店だよ」という居酒屋をチョイスしてみた。



日本酒と焼き牡蠣 ながおちゃんの店だよ

すすき野から資生館小学校にすすんだところに店はある。一帯は繁華街なのでお兄さんたちに次々に声をかけられた。いい娘いますよ、何かおさがしですか、遊んでいきませんか。お兄さんたちの誘いを受け流して歩いた。

目的のビルは飲み屋や風俗店が入っている雑居ビルで、1階はホストクラブだから足を踏み入れにくい。しかし3階にゆくといかにも居酒屋という雰囲気「ながおちゃんの店だよ」はあり、入ってみればとてもフレンドリーなのだった。



白貝の焼き物 ホンビノス貝か？

カウンターにすわり、レモンサワー400円と肉がたべたかったからジンギスカン800円を注文する。ここは肉よりも魚介に強く、とくに炭焼き専門の板さんがいてその腕が素晴らしい。そこで厚岸産の牡蠣と白貝焼きを日本酒でたのしんだ。

ながおちゃんの店だよ、は穴場でじつによかった。満足してホテルに帰ろうと思うが、かなり酔っていることに気づく。これは無事にもどれるだろうかと自身で危ぶんだが、なんとか帰ることができた。翌日カメラをチェックすると、記憶にのこっていない街の夜景の写真がたくさん撮られていた。



大通り公園

270. 1キロ



ルートイン・ホテルの朝食バイキング

いつもの時間、4時半に眼がさめた。まだ暗いしカラスが鳴いていないから、夜は明けていないのかと思ったら、ここは札幌のホテルで今日は曇っていることに気づいた。5時から大浴場がオープンするので朝風呂にゆく。6時15分からバイキングの朝食がはじまるので、その前に荷物をまとめてバイクに積んでおいた。しかしルートイン・ホテル、大浴場はあるし朝食もついてこの値段はお値打ちだ。ここにしておよかった。

今日は小樽からフェリーに乗る日だ。北海道ツーリングも終わりなのだ。朝食をすませて駐車場にゆくと群馬ナンバーのハーレー氏がいる。ハーレー氏はホテル泊で北海道をまわってきたそうだ。そのハーレー氏に手を上げて6時45分に出発する。ハーレー氏も同じ小樽発のフェリーに乗るそうだ。

セイコマでフェリー内での食料を買い、札幌南1Cから札幌道にのった。前方の小樽の上空には雲がかかり、雨の匂いがする。降らなければよいのだがとっていると、気温はさがり涼しくなった。

銭函で事故、通行止め、とでている。銭函で高速は封鎖されていた。国道におりるが料金は100円かと思ったら200円もする。札幌南一銭函は近いから200円は高すぎる。

小樽に近づくと雨が降りだしてしまった。しばらく我慢して走るがセイコマがあったので雨宿りをすることにする。都内ナンバーのアフリカ・ツインもいて、彼もフェリーに乗るそうだ。

小降りになったところで出発する。フェリーに乗る前に給油をした。これで明日新潟についても思い切り走ることができる。ターミナルにつくと雨はあがり日差しがでた。そしてまたしても耐えがたく暑くなった。今年の北海道は最後まで異常な暑さだった。

乗船開始となったがDRのエンジンがかからない。中途半端に冷えたからだ。こうなると手こずることが多いから、後にならんでいるライダーに先にいってもらい、キックを10回くらいすると、ようやくエンジンは目覚めてくれた。

エンジンをストールさせないように気をつけて船に入ってゆく。バイクは多い。オンロードの大型車中心で、オフのビック・マシンであるBMW R1200GSやトライアンフ・タイガー、アフリカ・ツインにトランザルプもいるが、林道走行をしているのは私だけだ。ダートを一度でも走ればバイクは泥と埃で汚れるから一目でわかるのである。しかしバイクが50台以上いて、オフロード・バイクもいるのに1台だけというのはさみしい。林道走行

はすばらしい体験なのに。



乗船を待つバイク

船内ではメモの整理などをしてすごす。それも終わってサッポロ・クラシックを飲むが、これがこの旅で最後のサッポロ・クラシックとなった。

34. 9キロ



フェリーより

いつもの時間の4時半に起床した。新潟港に接岸する前の6時に案内放送がはじまる。バイクの順番となったので船倉において準備を開始した。DRのエンジンはすぐにかかった。冷えきった状態ではチョークをきかせて始動するのに問題はない。アイドリングしないのと、中途半端に冷えるとむずがってかかりが悪くなるのが、困った症状なのだ。エンジンをストールさせないようにアクセルをあおりつづけ、6時20分に下船した。

フェリーをおりたバイクは一団となって関越道にむかうが、私はしばらく国道をゆくことにする。むろん高速代を節約するためである。新潟の国道は高速道路のようで順調にすすむ。しかしレストランがない。新潟駅から離れると営業している店がないのだ。燕三条の杭州飯店で三条ラーメンをたべたいと思っていたが、10時開店だからそんなに待ってられない。走りつづけているとすき家があった。ここで朝カレーの朝食をとったが、280円と安いけど味はよろしくなかった。

三条、長岡、小千谷と快調にすすんでゆく。湯沢に9時30分について、三国峠をこえるのはとても時間がかかるから、ここから関越道にのることにした。国道の長いトンネルをぬけると気温は24℃となり涼しくなった。空も真っ黒な雲におおわれ、今にも降りだしそうだ。どうせ雨になるなら、林道で汚れたバイクがきれいになるように土砂降りになってほしい。エンジンやサスに付着した泥を落とす手間がはぶけるから。

駒寄PAの手前で雨が降りだした。PAに入ってカッパをつけていると雨足は弱まり、走りだすと止んでしまう。これではバイクはきれいにならないし、雨具をつけていると暑いではないか。そして群馬の先の埼玉、東京方向の空は晴れているのだった。

328キロ

総走行距離 2980キロ

ひたすらキャンプ・ツーリング 2012年北海道
<http://p.booklog.jp/book/70243>

著者 : hohrohgin

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hohrohgin/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/70243>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/70243>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ